

(公財) 京都「国際学生の家」
Kyoto International Student House

研究者棟新築及び
本館耐震・改修工事に向けて



SPECIAL ISSUE Vol.41
YEAR BOOK 2016

記念号を飾る表紙について

創設後半世紀にわたる成果を踏まえ、設立当時の諸先輩の意志を引き継ぎ、更なる半世紀に向けて「出会いの家」を共生社会の拠点として発展・維持させたいと思い、今回「本館耐震補強・改修工事及び研究者棟新築」の特集号を作製した。この募金活動の特集号の”YEAR BOOK”の表紙に相応しいデザインとして、1961年に創設者の神学者 W. Kohler 博士が作製した募金趣意書のパンフレットのものを使用させて頂いた。

このデザインは、丁度 2004 年度に創立 40 周年を開催した年に発行された創設 40 周年記念号 (YEARBOOK Vol.29) の表紙にも使用された。この時は、創設 40 周年を単に喜び祝うのではなく、創設当時の先達の募金の趣旨に心を馳せて、感謝をして欲しいという気持ちと、将来のために本学寮の歴史の記録として残しておきたいと願った日本側の創設者稲垣博博士のたつての願いでもあった (40 周年記念号の編集長は内海博司であったので、良く記憶している)。

今回は、半世紀前の当学寮設立の趣旨を再確認すると同時に、設立を成功させたパンフレットにあやかって、本募金の成功を祈念して、再度使わせて頂いた。

そこで表紙絵の解説は、表裏表紙に記された故稲垣博前理事長の文章をそのまま掲載すると共に、当時スイスの募金に使われた「募金趣意書」も再掲した (P7~P9)。(2017 年 3 月 10 日 内海博司 記)

1961 年、神学者 W. Kohler さんの構想に賛同したスイス市民有志が「出会いの家」協会 (Gesellschaft Haus der Begegnung) を設立し、既に 1959 年、実験的に開設されていたチューリッヒ「出会いの家」での経験を踏まえ、京都に同趣旨の「家」、つまり、この京都「国際学生の家」を創設するための募金活動を開始した。その募金活動のために作製されたパンフレットの表紙が、本誌の表紙に転写されている。草起された募金趣意書全文の邦訳は本誌 (P24~P25) に記載されているが (是非、一読を請う!)、以下にその原文中の一節を転載しておく (2005 年 4 月 3 日 稲垣博 記)

Regeln

1. *Der Friede kostet etwas. Es genügt nicht, sich nur mit Worten für den Frieden einzusetzen. Auch der Krieg kostet etwas. Wir bezahlen jährlich Millionen von Franken für die Ausbildung der Männer zum Krieg und für die Waffen. Wenn es uns wirklich um den Frieden zu tun ist, müssen wir Zeit, Geld und Kraft für den Frieden im Volk und unter den Völkern einsetzen. Wir sollen uns für ein Zusammenleben im Frieden einsetzen. Dieses Zusammenleben ist nur ein kleiner Beitrag angesichts der gewaltigen Anstrengungen für die gegenseitige Zerstörung. Menschen aus verschiedenen Klassen, Nationen und Rassen sollen einander begegnen, miteinander zusammenleben, um später an ihrem Ort aktiv den Frieden im eigenen Volk und unter den Völkern aufzubauen.*

巻頭言

「平和センター」としてのハウス ―協働の意義―

村田 翼夫

(HdB 理事、Year Book 編集委員長、筑波大学名誉教授)

ハウスの創始者であった稲垣博先生は、広島で被爆体験があり、世界における平和構築に貢献する方法としても京都「国際学生の家」を構想されていたと聞いている。このハウスは平和構築にも寄与していると思われるが、「平和センター」確立の方法や意義について考察してみる。

世界の平和確立を念願して設立されている平和センターは多く存在している。例えば、ノーベル平和センターは、2005年にノルウェーのオスロに設立された。ノーベル平和賞の歴代や歴代受賞者の功績を展示し、世界平和について楽しく学習できるようになっている。広島市の平和記念公園には、1955年に開館した広島平和記念資料館がある。原爆による被害の実相を示し、核兵器廃絶と世界恒久平和に実現に寄与することを目的としている。2004年8月にスリランカの首都コロンボにあるサルボダヤ・シュラマダーナ運動の本部を訪ねた時に、「平和黙想センター」に案内された。そこでは、多くの人々がスリランカのみならず世界平和のために黙想祈願しているとのことであった。サルボダヤ・シュラマダーナ運動は、アリヤラトネ博士が1958年から始めたもので、貧しい農村の自主的な協働活動を通して地域開発を図る民族協調の運動である。

さらに、タイの南部地方のヤラー市にある「平和センター」は、ルン・ケオデー博士（元タイの元教育副大臣、元国家教育審議会事務局長）が、マレー系イスラーム教徒とタイ系仏教徒の平和共存・共生を狙いとして2002年に設立したものである。南タイには、パッタニー王国が存在していた歴史もあり、イスラーム教徒のマレー系タイ人が多く居住している。中には、南タイ地域（パッタニー県、ヤラー県、ナラティワット県、ソクラー県）のタイ国からの独立を志向する人々もいる。マレー系イスラーム教徒とタイ系仏教徒の間でしばしば対立、紛争が発生しているのである。最近も、南タイの自治権拡大や独立を要求する過激派のテロが起きている。創設された「平和センター」は、こうした背景を持つ南タイにおける平和構築を目指す野心的センターである。

設立当初は「平和カレッジ」と呼ばれ、地域のリーダー達の相互理解、異文化理解の促進を目標としてセミナーやワークショップを中心とした対話が試みられた。リーダーには町村長、町村会議員、宗教家（僧やイスラーム教師）、学校長、医者、警官等が含まれていた。文化、習慣、信条、思想などに関する話し合いは大切であるが、それによる理解は表面的に終わりがちで生活の様式や習慣を変化させるまでには至らな

かった。それ故、次の段階として検討されたのは、共同の活動経験、協働作業・勤労であった。主に二つのプロジェクトが展開された。

一つは、青年たちのキャンプと技能訓練である。イスラーム教徒と仏教徒の青年が共同で3泊4日のキャンプを行った。各種のスポーツ（バレーボール、バトミントン、セパタックローなど）やダンス、それに簡単なおやつ作り、養魚、自転車の修理なども習った。孤児や高齢者の世話も行った。その上、キャンプ以外の時にも工芸品作り（バティック、ネックレス制作など）、有機野菜作り、お茶の栽培、バイクの修理などの技能訓練も実施された。マレー系の青年の間では、麻薬を吸引する者が多いため、彼らに技能を身につけ仕事に就かせることが目標とされた。

二つ目は、成人向けの共同事業として行われた2007年から山羊の飼育、2011年から牛の飼育やオイルパーム（油椰子）の栽培である。山羊は病気になりがちなのと住民に貸した山羊が返済されなかったということもあって、2011年に中止された。牛は、従来からタイで飼育されてきているが質がよくないため評価されていなかった。「平和センター」では、良質の牛を共同で飼育し、高値で販売しようとしている。特に、和牛の輸入を心掛け、栄養価の高い餌作り、牛舎作り、放牧、ミルク採取などを協働作業として実践している。

筆者は、2014年8月に同飼育場を参観し、牛の飼育協働作業を確認してきた。丁度、和牛の子牛が生まれ、センター長（ルン博士）から兵庫県に由来する命名を依頼されたので「六甲 ROKKO」と名付けた。その後、協働作業のおかげで順調に成長していると聞いている。

こうした山羊、牛の協働飼育、オイルパームの協働栽培を通して、信条の異なるイスラーム教徒と仏教徒のタイ人がお互いに人格的に交わり、相互理解、異文化理解を深め信頼関係を築いている。その成果が収入の拡大につながれば一層、両者の絆は強化されるであろうし、地域社会の平和確立に貢献すると期待されている。このように対話の機会に限らず、共同キャンプ、協働作業、協働事業を通して対立していた人々の異文化理解、相互信頼の増進ならびに地域の平和構築を目指していることは、多文化共生活動を促進する観点からも注目される社会的、教育的大事業といえよう。

なお、異文化理解促進のためには、文献資料による方法もあるが、対話や協働体験を通して互いに信頼の絆を固めて理解を深め共存を図ることが基本的に重要である。対話は、主体である「わたくし」と客体である「あなた」が向かい合って成り立つ。しかし、主体と客体の関係では、個別的・特殊的で、対話は表面的に終わりがちで深くならない。「わたくし」と「あなた」の主体同士が同時に客体でもあり得る間主観的な関係性、すなわち「われわれ」という共同性を成立させれば、深い理解に達すると思われる。「われわれ」意識をもたせれば主体間にある心的隔たりが狭まり、個々人を包摂した共通世界が実現されよう^{注1}。異質な人々が協働で共通の計画やプロジェクトに取り組み合同作業を行えば、対話の領域を超えて人格的な交わりを促進することになり、信頼関係も芽生えてくる。その結果、異なる思考様式、行動様式の理解に留まらず、「われわれ」意識に基づく共同体を構築しやすくなる。協働の経験を通して「わ

れわれ」の共同体を構築すれば、平和な多文化共生の状態を実現できるのではないであらうか。

こうした協働活動・作業を重んずる「平和センター」のプロジェクトは、京都「国際学生の家」の原則にも合致する有意義な実践と思われる。ハウスの原則および生活の基本として、第1に、人種、国家、階層、家柄や、信条、宗教、習慣などの異なる人々が、「共同の生」を通して相互に出会い、相互に尊重し、相互に生活を共にしつつ平和共存の在り方を探求する。第2に、「共同の生」とは、自由に生きることであり、画一化や統制を退け、各人の相違、多様性を受け入れる。“We have the freedom to agree to disagree with each other.”も基本原則とする。第3に、コモン・ミール、セミナー、スポーツディ、旅行、国際食べ物祭り、感謝祭、大掃除などの行事への参加や各種の役割分担（掃除、新聞・雑誌整理、Year Book 編集、コモン・ミール準備等）を積極的に引き受け、メンバーとの協働の経験を共有する。

ハウスのレジデントは、これらの原則に従い、特に第3の原則（生活の基本）に示した共通の行事や役割分担を協働で行うことにより、異文化理解を深め、お互いの人格を尊重しつつ信頼関係を培い、平和な社会確立の方法を学んでいる。この「共同の生」は、基本的に南タイの「平和センター」の理念、実践と通ずるものがある。文化、宗教、習慣の異なるメンバー同士が、一緒に協働の体験を持つことにより信頼関係を築き平和構築のあり様を模索し合うのである。議論、対話の段階、すなわち「わたくし」と「あなた」の関係に留まらず、直接、相互に作業をしたり、相談しあったりすることが大切である。そのことが、協働体験、協働の国際交流を進めながら「われわれ」意識を育み、「平和センター」としての共同体構築を促進することになる。京都「国際学の家」のメンバーが、今後とも共通行事、役割分担、その他、ボランティア活動などの重要性を認識して協働体験に励み、「平和センター」としての役割を遂行してもらいたいものである。

注1. 増淵幸雄『グローバル化時代の教育の選択』上智大学出版、2010年、48~49頁



「平和センター」事務所及び放牧場。右側の子牛が「六甲 ROKKO」2014年8月筆者撮影

～ 目次—CONTENTS ～

・村田 翼夫	巻頭言：「平和センター」としてのハウス —協働の意義—	1
・目次		4
・Principle and Purpose		6
【研究者棟新築及び本館耐震補強・改修工事に向けて】		
・内海 博司	研究者棟新築及び本館耐震補強・改修工事支援募金趣意書	7
・内海 博司	研究者棟新築及び本館耐震補強・改修工事に至る経緯	11
・嘉田 良平	新たな社会貢献をめざして	19
・稲垣 博	スイス「出会いの家」協会とその活動について	23
・ウエルナー・コーラ	「出会いの家」創設趣意書	24
【ハウスの特色と意義】		
・シュペネマン・クラウス	出会いの家	26
・川野 家稔	京都「国際学生の家」の意義	29
・鈴木 松郎	HdB との出会い	30
・ダニシマズ イディリス	京都「国際学生の家」における生活に関する評価 —他者理解という観点から—	32
・Ranjan Kumar	Lessons@HdB!	33
・レナト ルスカ	ハウスが教えてくれたこと	35
・Abdykadyrova Chinara	出会い精神の継承を願って	37
・Yan Jiang	Learning in HdB	39
・Winiji Ruampongpattana	Changes in the past 3 years	40
・Luca Bergfelder	Encounters in HdB	42
・沈 家銘	心と心の触れ合い HdB で	43
・Youngsoo Choi	HdB の生活	45
【HdB を巣立って】		
・Elisabeth Vollenweider-Varga	Remembrance of HdB and Sakura	47
・置田 和永	退職後の生き方を教えてくれた HdB との出会い	49

・倉田 麻里	HdB からフィリピンそして故郷へ	52
・Frederic Sausee	Embracing 2017	54

【活動報告】

・飯田 悠哉 (ハウスファーザー)	ハウスペアレントとしての最初の1年間を振り返って	57
・2016年度 京都「国際学生の家」活動表 (前期・後期)		60
・2016年度 Welcome Party speech (前期・後期)		61
・Common Meal (前期)	当番代表 Kyungmin Lee	63
・Sports Day (前期)	当番代表 Sarasa Amma	64
・Seminar (前期)	当番代表 Chiaming Shen	66
・Trip (前期)	当番代表 Ji Seul Park	67
・International Food Festival	当番代表 Christopher West	68
・Cleaning Day (前期)	当番代表 Akanksha Tyagi	69
・Common Meal (後期)	当番代表 Kaori Yoneto	70
・Sports Day (後期)	当番代表 Yijun Chen	71
・Thanksgiving Day	当番代表 I-Ting Huai-Ching Liu	72
・Trip (後期)	当番代表 You-Shan Tsai	73
・Christmas Party	当番代表 Anika Arenz	75
・Cleaning Day (後期)	当番代表 Chiaming Shen	76
・Seminar (後期)	当番代表 Alexander Van-Brunt	77
・High-Tech and PR	当番代表 Hossam Elsaka	78
・Year Book	当番代表 Ko Yanase	79

【資料】

・(公財)京都「国際学生の家」役員等		80
・2016年度 寄付金・献金等		82
・(公財)京都「国際学生の家」の略史		83
・(公財)京都「国際学生の家」利用者の集計		87
・後援会会則		90
・施設概要		91

葛田 正人	編集後記	92
-------	------	----

PRINCIPLE AND PURPOSE

by Dr. Werner Kohler

“Haus der Begegnung” is a house where men from different continents and cultures, of different races and colors, different social strata, religions and outlooks live together. The house members face realistically the difference of national, cultural and religious backgrounds. It is a “House of Encounter” as its name “Haus der Begegnung” indicates. It is an experimental training place for peace, which is not merely absence of war, a training place for the construction of a new form of society necessitated by the demands of the world of tomorrow.

The house life is guided by the following considerations.

1. The living together in the International Student House Kyoto is not an end in itself. Nor is it a world of its own. It is concerned with the daily human society to which we all belong. Our human society, as history shows, is in need of constant renewal. Forms of society change, old traditions decline, new ones arise; but Life Together is the destination of man.

2. Life Together is life in relation with others, with those we like and those we dislike, with those who have different convictions and opinions. Life Together means love and respect for those who are different. We have the freedom to agree to disagree with one another.

3. Life Together is life in daily renewal. We all have a natural inclination to favor our own beliefs and concepts. The house members let themselves be mutually questioned and challenged in their opinions, attitudes and habits. By nature we are inclined to have relations with, and fulfill responsibilities to, our own family group and those of our own social milieu or those that are useful to us. We aim to outgrow these self-centered inclinations. Life Together allows for diversity and runs counter to conformity and unconformity. The traditional societies classify people according to their educational, political, moral and financial standards. Life Together transcends these traditional classes.

4. Life Together is an adventure and an experiment. “Haus der Begegnung” in Kyoto practices in small dimension a new form of society. This new society is both conservative and revolutionary in that it respects the past with its traditions and looks to the future with its possibilities. It is a form of society which is renewing itself in free self-criticism of its members. The basis of this Life Together is Life itself.

Thus it is hoped that students living in this house are willing on their own initiative to participate in various activities such as seminar-like meeting, common meals and house chores of different kinds.

*Dr.Kohler was the most central among the forwarders of HdB in 1965. He and Dr.Inagaki served as the first House Farther.

【研究者棟新築及び本館耐震補強・改修工事に向けて】

公益財団法人京都「国際学生の家」

研究者棟新築及び本館耐震補強・改修工事支援募金

趣 意 書

京都国際学生の家沿革・特徴

今から半世紀前の1965年に、(公財)京都「国際学生の家」(Haus der Begegnung: 邂逅の家、以下HdB)は、スイスや日本の篤志家の寄付金により私立の留学生寮として設立された。京都大学本部地区の南、約500メートルの地(聖護院東町)に位置しています。留学生と日本人学生が共同生活を通じた「共同の生」の実践を目的としており、(各国当りの入居留学生数に制限を設ける他、日本人寮生は1/3とするなど、共同の生の場の確保を図っています)かつ、ハウスペアレント(住込み管理人)が学生と一緒に住み共同生活を支援するという、官立の寮にない大きな特徴を有しています。

活動継続の必要性と条件

冷戦時代後「多極化」が進みました。その流れの中で、9.11のテロ以来、パリやベルギーなどでの大規模テロ、民族・宗教にまつわる対立が表面化し、「グローバル化」と「貧富の格差」が拡大して、刻々と我々を取り巻く国際社会は変化を続けています。最近の国際的動きは、英国のEU離脱、米国の大統領選に象徴されるように、グローバル化を弱め、自国優先主義やポピュリズム(大衆迎合主義)に流れようとしています。

設立以来、50有余年が経過しましたが、人種、文化、宗教等の多様性を尊重し、個人と個人との「邂逅・出会い」を重視して、「共同の生」を掲げて活動を続けてきたHdBの存在価値は、過去にもまして、ますます大きくなっていると判断します。2016年には創立50周年の節目を迎えましたが、設立当時の建築基準が現行の震災対応に合わなくなっており、阪神淡路大震災・東日本大震災・熊本大震災など日本列島を襲う大地震に対する本館の耐震補強と、研究者棟の取り壊しの必要性が明らかになりました。

所要資金

今後更に半世紀にわたって安定して継続させ、国際感覚を身につけた有為の人材を世に送り出し続けることをめざし、本館の耐震補強を含む経年補修の実施に加え、大学に來られる海外研究者だけでなく企業に來られる外国人なども入居できる新研究者棟を設置し、①多文化共生拠点、②国際民間企業連携拠点、③コミュニティ防災拠点とする計画です。

本館関連で1.5億円、研究者棟の新築に1.0億円 約2.5億円の資金が必要です。そこで、HdBの在寮生、卒寮生および広く企業、財団、各種団体、個人の皆様には、この趣旨にご理解をいただき募金へのお力添えを賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

なお、ご醸金の免除措置につきましては、当財団が「税額控除」の対象として認められ、「税額控除」または「所得控除」いずれか有利な方式を選択できる寄付金控除を受けています。

(公財)京都国際学生の家 理事長 内海博司 (京都大学名誉教授)
募金委員長 理 事 吉村一良 (京都大学教授)

1. 募金の使途

(公財)京都国際学生の家の西館を建て替えて作る「新研究者棟」の建設と本館の耐震補強・改修工事に資するものです。主な使途は以下の通りです。

なお、大口のご寄付で、使途の特定を希望される場合には、個別にご相談させていただきます。

2. 資金計画

初期の目標を約 1.5 億円とし、目標達成後も研究者棟の新築費用約 1 億円を目標として設定します。

- 本館の耐震補強・改修工事：約 1.5 億円（税込み）、耐震強化工事と老朽化した電気水道等の設備の改修工事、災害時の地域の避難場所になれる設備を設置。食事会、セミナー、礼拝の場、講演会、多言語会話教室、スポーツ室等のほか、地域に開かれたホールとして、災害時の避難所として活用します。
- 研究者棟の新築（木造 2 階建て）：約 1 億円（税込み）、老朽化した研究者棟（西館）の新築。研究者・学者用の宿舍収入は、学生達の宿舍代を補助し、年長の有識者と学生との日常的な交流が目的であったが、今回の新研究者棟は、研究者・学者だけでなく、留学生と地場企業との交流を推進する目的もあり、会社などに来日された外国人技術者の宿舍としても活用します。

3. 寄附金について

目標としては、法人（大企業）は 1 千万円、個人は 10 万円をめざしています。

4. 寄附金の形式と寄附金の申込・振込方法

(1) 寄附金の申込方法

「寄附金申込書」に必要事項記載のうえ、下記事務局まで FAX または郵送して下さい。お申し込みは随時受け付けます。

(2) 寄附金の払込方法

ご寄付をお申し出いただいた後、(公財)京都国際学生の家より送付します「寄附金払込依頼書」により、銀行からお振り込み下さい。振込手数料は当財団が負担します。

(3) 寄附金の形式

(公財)京都国際学生の家の寄附金として納入され、「(公財)京都国際学生の家寄附金事務取扱規程」により、経理されます。

● 個人の場合

寄附金控除制度の「税額控除」または「所得控除」いずれか有利な方式を選択し、寄附金控除により、減税効果を大きくすることが可能です。

● 法人の場合

- 「特定公益増進法人」への寄附として、一般寄附金の損金算入限度額とは別に、別枠の損金算入限度額が設けられています。免税措置については、下記の URL でご確認ください。

(公財)京都国際学生の家寄附金控除関連ページ

[URL] <http://hdbkyoto.jp/寄附のお願い>

5. 寄附に関するお問い合わせ先： (公財)京都国際学生の家寄附金事務局

事務局長 理事 嘉田 良平 (四條畷学園大学教授)
事務員 樋口 洋子

住所：〒606-8325 京都市左京区聖護院東町 10 番地

TEL:+81-78-771-3648 FAX:+81-78-771-3648

6. 募金委員会

募金委員長 理事 吉村 一良 (京都大学教授)

募金委員 理事 上村多恵子 (京南倉庫(株)代表取締役社長)、嘉田良平 (四條畷学園大学教授)、永井千秋 ((公財)神戸国際医療交流財団 医工連携人材育成コーディネーター)、深海八郎 (眺八海倶楽部総支配人)
評議員 秋山雅義 ((公財)応用科学研究所理事)、岩崎隆二 (和晃技研(株)代表取締役社長)、平野克己 (日本塗装機械工業会専務理事)



公益財団法人 京都国際学生の家とは

京都「国際学生の家」(Kyoto International Students House)は、スイスと日本の国際的協力による市民レベルの寄附金によって1965年4月1日、京都最初の留学生寮として開寮しました。設立者 Werner Kohler 博士(ハイデルベルグ大学教授、1984年逝去)の設立理念は、設立時に起草された Principle and Purpose(6ページ)に凝縮されており、当学寮を「邂逅の家(HdB, Haus der Begegnung, House of Encounter)」と別称する所以です。

当学寮は、設立理念である「共同の生(Life Together)」と「邂逅・出会い(Encounter)」を掲げた特徴的活動を実践しています。ハウス・ペアレントとその家族が、この「共同の生」の助言者として常住し、寮生及び研究者等と共同生活を営んでいます。寮生数(34名)の3分の1は日本人学生で、一つの国から入寮出来る留学生は原則として3名以内です。寮生は、寮生活に必要な種々の仕事を分担し、国際相互理解を促進する各種行事を行っています。寮生達は一緒に各国の料理を作り、食を通じて語り、それぞれの国や人々を理解する「コモンミール」を柱に、「ハウス・ミーティング」や「セミナー」などの活動を行っています。更に、この寮を支えて下さる後援者達に感謝する「感謝祭」や、地域の方々を招いて、各国の代表的な料理を味わっていただく「国際食物祭」など、広く国際相互理解の場を提供しています。

しかしながら、「共同の生」は、単に一緒に暮らし、一緒に活動することだけではありません。設立理念に記されているように、「共同の生」は、異なった信念や意見を持った人や、好きな人も嫌いな人もお互いに関係を持ちながら、これらの人達を愛し尊敬するという価値を重視しています。私たちには、お互いの意見に同意したり、同意しない自由を持っています。ここは、単に戦争が無いというのではない、真の平和のための訓練場なのです。

開館以来50年間に、寮生用34室を利用した寮生は世界の81ヶ国から973名、併設されている研究者用11室を利用した学者、研究者は94ヶ国から2,992名の多きにのぼります。これらの寮生、研究者達は、京都における学際的研さんの成果と共に、この「家」で体験した人間同士の愛と連帯意識をもって世界中で活躍しています。1985年には、このような国際交流活動が高く評価され「国際交流基金」の第一回「国際交流奨励賞地域交流振興賞」を受賞しました。

詳細は、(公財)京都国際学生をの家のホームページをご参照下さい。[URL] <http://hdbkyoto.jp>

研究者棟新築及び本館耐震・改修工事に至る経緯

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授)

現在直面している建物の耐震対策を契機として、本法人の歴史を振り返ると共に、その存在意義の再検討、西館（研究者棟）を解体し新築、そして本館の耐震補強・改修工事に至った経緯について記す。

1. 創始者 Werner Kohler 先生と稲垣博先生:

1984 年 8 月にご逝去された Werner Kohler 博士は、スイス東アジアミッション (SOAM) から京都に派遣された牧師であり、同志社大学の教授でした (1954 から 1959 年)。日本人数名と一緒に生活した異文化体験から、神学と哲学を基礎にした「出会い」の重要性に気付き、「出会いの家」(HdB: Haus der Begegnung) の構想を得て、京都に HdB を建設すべく、スイスで募金活動を始められた (表紙のデザインと「出会いの家」創設趣意書を参照 24 ページ)。それは、「Principle and Purpose」に具現化され、現在の HdB に生き続けている。当然、HdB と称すべきだが、不思議なことに「別称」となっている。スイスは、国自体が既に国際的で学生達も国際的ですので、留学生寮を作るとしても、敢えて「国際」という言葉は必要としない。しかし、日本では HdB (出会いの家) と称しても、留学生寮とは理解されないとして、「国際」という言葉が使われたそうである。

当時日本にも留学生寮は存在したが、留学生に宿舎を提供するだけで、日本人は入居できず、留学生寮を「国際的な人間教育の場」と位置づけて運営している宿舎はなかったし、現在も同様と思われる。そこで HdB は、在来の留学生寮とは質的に異なることを示すため、「家庭」に通じる「家」、つまり「国際学生の家」(Kyoto International Student House) に決めたといわれている。

“Haus der Begegnung” is a house where men from different continents and cultures, of different races and colors, different social strata, religions and outlooks live together.

The house members face realistically the difference of national, cultural and religious backgrounds. It is a “House of Encounter” as its name “Haus der Begegnung” indicates. It is an experimental training place for peace, which is not merely absence of war, a training place for the construction of a new form of society necessitated by the demands of the world of tomorrow.

2007年1月にご逝去された稲垣博博士は、広島での被爆体験から世界の平和に貢献したいと考えられていた。ドイツの在外研究出張のためにドイツ語を習う目的もあり、キリスト教徒であった和子夫人を通じて1960年にコーラ博士と出会い、コーラ博士の考えに賛同して、京都「国際学生の家」建設のため日本での募金活動を主導され、約3.2千万円を集められた。一方、スイスプロテスタント教会(HEKS)は、京都「国際学生の家」建設のため、邦貨として約5.5千万円を集められた。更に、スイス東アジアミッション(SOAM)は、京都の聖護院の土地を60年間無償で使用することを許可、浄土宗大本山・くろ谷はHdBの玄関通路の土地を60年間貸与して下さっている。

湯浅八郎初代理事長はじめ創設者達は、京都だけでなく〇〇「国際学生の家」が日本中に出来ることを願って、国際学生の家を「」に入れたそうである。しかし未だ実現されていない。公益財団法人後は、インターネットで「」が使えないという理由で、「」を外した(公財)京都国際学生の家が正式名となり、(公財)京都「国際学生の家」の名称は非公式名となり非常に残念である。設立20周年の年(1985/10/1)に、HdBの地道な活動が認められ、国際交流基金より「国際交流奨励賞 地域交流振興賞」の第一回受賞団体として顕彰されたことを誇りに思っている。

2. HdB 閉鎖の危機と 2001 年学寮の再興:

21世紀を迎える直前HdB構想に賛同し、創設募金を集め、その後35年間もスイスハウスペアレントを送り、HdBの共同経営を行ってきたSOAMは、その後HdBの運営方針に異を唱えて協働体制を解き、寄附行為からもSOAMの名前が消え、日本人とスイス人のハウスペアレント2組制は消え、現在は日本人ハウスペアレントだけで運営している(1999/12/31)。同じ頃、ボイラー等の大型付属設備の老朽化と建物自体が「防火不適合建造物」と認定されたこともあり、この改修資金が集まらなければHdBの閉鎖という危機に直面した。そこで、HdBの若手関係者が集まり、このユニークな学生寮を続けたいと決意し、吉田和男理事(当時京大教授)を募金委員長として、学寮改修工事の募金活動を開始した(1998/7)。大不況の時期にも関わらず、元在寮生(Old Member,OM)や在寮生が文部大臣に学寮存続を直訴、これに呼応して、京都の諸企業、国、地方自治体、多数の市民の拠金によって改修費(5.8千万円)が集められ、閉鎖の危機を回避した。

3. 再興式典(2001)と創立 40 周年記念行事(2004) :

再興式典(2001/9/1)も終え、2004年11月に創立40周年記念行事を終えた頃、稲垣理事長は病魔に倒れられた。当時SOAMがHdBと縁を切る理由として、地域との交流を目指した「国際食べ物祭り」以外は、コーラ博士の敷いた活動を踏襲しているだけのHdBの運営方針に問題があると非難したこともあり、死の床までHdBの責任者として苦悩されていた。その反省からOM達にアンケートを取って、HdBをより発展させるような「新しい活動を模索せよ」と言うのが、遺言となった(2007/1/20)。しかし2009年スイスで開催されたSOAMの125周年記念事業(2009/7/4)に、内海(理事長

就任 2007/5/20) が出席する機会があり、HdB との協働関係を切った真の理由は、HdB の経営方針では無く SOAM 自体の経済的危機であったことを知った。

4. 創立 45 周年記念行事(2010/11/6)と公益法人への移行 (2013/3/19) 及び税金控除 (2015/3/31) :

2006 年の公益法人制度改革法の施行に伴い、2010 年は「財団法人」の最後の年であり創立 45 年に当たるとして記念行事(2010/11/6)を開催した。そこで、当時では極東の日本(京都)に HdB を創るために、寄附をされたスイスの一般市民に思いを馳せ、感謝し、創設者であるコーラ・稲垣両博士の精神を守り続けることを再確認した(「出会うの家」協会 (Gesellschaft Haus der Begegnung) を参照 23 ページ)。2013 年には「公益財団法人」への移行登記が完了した(2013/3/19)。当財団への寄附金の「所得控除」は、これまでも数年おきに申請して許可されていたが、「公益財団法人」では自動的に「所得控除」が受けられることになった。更に 2015 年には当財団への寄付者が 100 名以上で 5 年間続いたことで、「税金控除」の対象として認められた。今後は、当財団に対する寄附金は「税額控除」または「所得控除」いずれか有利な方式を寄付者が選択できることになった。(2015/3/31)。

5. 再び、HdB 存続に暗雲 :

「公益法人化」及び寄附金の「税金控除」のハードルを越えた頃、新たな問題に直面した。阪神淡路大震災・東日本大震災など、日本列島を襲う大地震に備えて、HdB のような公共の建造物は「耐震診断」を行い、行政(京都府)に報告する義務が生じた。そこで 2013 年 HdB を建設した「竹中工務店」に耐震診断(一次耐震診断)を依頼した。残念なことに建築後半世紀の内に耐震基準は大きく変更されており、本館及び西館とも耐震補強は不可欠と判定された。本館の補強・改修には、最低 1.5 億円はかかり、補強しても何年建物を維持できるかは不明という厳しい診断であった。

この耐震問題を契機に HdB 理事会は将来計画委員会を立ち上げ、学寮以外の人達の見聞も聞きながら、HdB の存続意義、過去の成果と将来性及び、新築も含めた耐震対策工事などについて検討を重ねてきた。

6. HdB の Principle and Purpose は、現在でも通用するか? :

「東西対立」、「冷戦」、「ベトナム戦争」等に象徴される 1965 年当時に HdB は設立された。その後「ドイツ再統一」、「ソ連邦の解体」などで東西対立は終結し、アメリカの「一極支配」になるとみえたが、「欧州連合 (EU)」及び「上海協力機構」の成立による「多極化」が進んでいる。しかし、9.11 のテロ、フランスの風刺週刊紙襲撃事件や日本人質事件など、民族・宗教にまつわる対立が表面化し、「グローバル化」と「貧富の格差」が拡大して、我々を取り巻く国際社会は刻々と変化を続けている。

プリンストン高等研究所のダニ・ロドリック教授は、「世界経済は、グローバリゼーション、国民国家、民主政治は、トリレンマの関係にあり、同時にこの三つを実現す

ることはできない」と指摘している。グローバル化を弱める場合には、国民国家と民主政治を強める方向に流れると予想されているが、最近の国際的流れはイギリスのEU離脱、トランプ大統領の誕生に象徴されるように、自国優先主義やポピュリズム（大衆迎合主義）が台頭して、これまでのグローバル化の歴史を逆流させる動きをしている。急激なグローバル化とテロによって引き起こされた何十万という難民流入に対する反動であろう。理想的には、各国が戦争や紛争を止め、国民国家と民主政治を成熟させ、多文化共生を保ちながらのグローバル化を行うことである。更には、地球人類全体の平和共存を考える世界連邦政府のような組織ができる必要がある。しかし、大国主義がまかり通る現国連の現状を見ても、そのような世界連邦政府の成立は非常に難しいであろう。仮に世界連邦政府のルールが民主的につくられるにしても、その共通のルールを遵守させるには、現状では国による多様性が余りにもあり過ぎる。残念ながら人類がそのような域に到達するには、まだまだ時間を要すると思われる。

それだけに、人種、文化、宗教等の多様性を尊重し、個人と個人との「出会い」を重視して、「共同の生」、つまり平和共存を掲げて地道な活動を続けていく必要がある。その理想を掲げて半世紀も活動を続けてきた HdB の存在価値は、過去にもまして益々大きいと痛切に感じている。

7. HdB の特徴：

現在 19 万人以上もの留学生が来日しているが、彼ら留学生に単なる宿舎を提供するだけであっては、日本人学生にとっても留学生にとっても、日本や世界にとっても、非常に残念なことだと思っている。明治以降急速な近代化に成功し、古い慣習や文化も維持している不思議な国、日本に憧れ・日本を選び・学びにきた留学生達を、「国際的な人間教育の協力者」として位置づけ、日本の学生達との共同生活を通じて国際的理解と友愛を培い・深める「人間理解・人間形成の場」として、更には「世界平和を築く人材養成の場」として機能している留学生寮は、我が HdB だけだと自負している。そして、このユニークな留学生寮を日本全国・世界各国に普及して行くためにも、HdB を今後も維持していかなければならないと考えている。

留学生寮としての HdB は下記のような特徴を持つ。

1. 1965 年に設立の、京都初の留学生寮。
2. 日本人と留学生とが同等の権利で入居する日本初の留学生寮。
3. ハウスペアレント（住み込み監督人）が学生と一緒に生活し、日々の寮生活について、指導・アドバイスをする日本初の留学生寮。
4. 敢えて生活に不便な様に台所やトイレ、シャワー等を共用して、必然的に寮生同士の「出会い」を助ける寄宿舎形式の留学生寮（学生用ワンルームマンションとは大きく異なる）。
5. 公営ではなく民営故に、「理念や目標(principle and purpose)」を掲げて、「人間理解・人間形成の場」として、運営することが可能である留学生寮。
6. 平成元年から毎年「食」を通じた地域住民との国際交流「国際食べ物まつり」

という活動を続けている留学生寮。

7. 半世紀にわたる地味な活動を通じて培った国際寮を運営・維持する KNOW-HOW を持つ留学生寮。

8. HdB の西館の建て替え、本館の耐震改修について：

HdB の改修・新築する場合に、最低必要な学生の部屋数や研究者用の部屋数などを検討しておく必要がある。HdB は、ハウスペアレントと一緒に生活している「寄宿舎」であり、各自の部屋に洗面を装備しても、台所やシャワーは共用とする。コモンミールのために一緒に料理が作れるような部屋や、ピアノや卓球や玉突きなどの学生達が遊びながら集える部屋を作り、本学寮での日常生活なかで、自然に寮生同士がふれあえるような環境を持つ建物にする必要がある。箇条書きすると下記のようなことになると思われる。

1. ハウスペアレント室（子供が 2 人ほど居ても生活できる少なくとも 2LDK か 3LDK の部屋）
2. 学生の部屋数は約 30～34 室、洗面を設置
3. 研究者用の部屋には、台所・トイレ・シャワーを設置して、研究者用（単身及び夫婦）の部屋数を増加させる。（単身用は学生用より少し大きめで 10 室、夫婦用は 2LDK が 10 室）
4. 現在より大きいコモンミール用の台所及び学生用の台所の拡大（そこで食事をしながら談話できるスペース）
5. インターネットなどの充実など

9. 全館建て替えを含めた耐震対策工事について：

HdB が国内外の学生に、「共同の生」の「訓練の場」を提供するという基本理念を維持しながら、新時代に相応しい新しい活動（①多文化共生、②国際民間企業連携、③コミュニティ防災）を付加するような全館建て替えする案が、数社から提案された。しかし残念ながら、どの社も経済的基礎として土地を担保に借金するという提案であった。自分の持ち物でない土地を担保とし、借金の支払い期間も 30 年では、法人として責任が取れないばかりか、自己資金も 1～2 億円は必要という提案であった。

一次耐震診断では、HdB 本館の 1 階ロビーが壁の無い広い空間構造ため耐震に弱いと判断していた。更に半世紀も経た建物を幾ら耐震改修しても何年維持できるかの見通しも立たず、耐震補強案は十分検討されていなかった。

ここにいたって、ロビーを壁で区切り、部屋にするという耐震対策をとり、失ったロビーについては新たな別棟（1 階建て）として建築する案が検討された。この改修工事案では約 1.5 億円を費やせば、十分 4～50 年は安全に維持できること、改修に値しない研究者用の西館の建て替には、約 1 億円は必要という試算であった。この改修・新築工事案は、土地問題を考慮しなくても良く、全館の新築案で必要になる自己資金額と同額の募金を集めれば、借金無しで耐震対策ができる可能性が判明し、これまで

検討してきた案の中では、一番ハードルが低いと判断された。

但し、この改修案は一次耐震診断を基に作製されたもので、詳細な二次耐震診断（壁を穿ち、鉄筋の現状を把握する等）を基礎にした試案ではない。改修案を全館改築案と比較・検討するには、二次耐震診断の結果を基に、耐震改修に必要な経費を再算出する必要がある。そこで理事会は、費用（300万円ほど）を払って、二次耐震検査及び改修工事案の提案を受けることにした。9月の調査によれば、本館の建物はとても頑丈にできており、1階の東西の壁を補強する耐震補強工事をするだけで後半世紀は大丈夫という意外な結果であった。そして、耐震対策としては1千万円ほどで可能だが、将来半世紀に渡って維持していくには、ガス・水道・電気など主要な設備の老朽化が酷く、早急に対応する必要があること、新しい防火基準にかなった設備に整える必要もあること、窓のサッシやトイレなどの更新などをしないと安全な、維持・管理もできないことが判明した。改めて半世紀は安心して維持・管理できるような建物への改修と新研究者棟の新築案を提案して頂くことになった。

10. 研究者棟新築と本館の耐震補強・改修工事案について：

2017年の2月に入り、新しい提案を受けた。図は、旧西館を解体し本館内部の耐震補強・改修工事をし、新西館（新研究棟）を庭の南西コーナーに配置する見取り図を示す。

詳細は下記に記すが、総工費は、解体工事＋研究者棟新築工事＋研究者棟設計料＋申請等手数料＝¥98,578,000 -（税別）、そして既存本館改修工事＋既存本館改修設計料＝¥149,500,000 -（税別）で、計¥248,078,000 -（税別）であった。

●京都国際学生の家 耐震補強・改修及び新築工事（2017.02.23）

◎計画概要

- ・ 京都市左京区聖護院東町10
- ・ RC造 地下1階 地上4階建（寄宿舎）＋塔屋
- ・ 準防火地域、第一種中高層住居専用地域、近隣商業地域
- ・ 敷地面積 1900.28 m²
（敷地形状変更後：増築部分350.05 m²、既存部分1550.23 m²）
- ・ 本館（地下1階 地上4階建）昭和40年4月 竣工（確認及び完了検査済）
- ・ 西館（地上2階建）昭和44年5月 竣工
- ・ 改修工事 平成13年 竣工

◎解体工事

- ・ 既存西館及びキャノピー解体

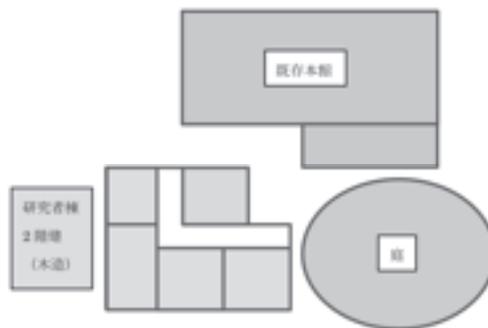
◎研究者棟新築工事

- ・ 木造2階建て

◎既存本館改修工事

- ・ 耐震診断結果による耐震補強

- ・ 定期調査報告書及び経年劣化
目視調査による劣化損傷の補修
- ・ 設備配管やり替え（電気・ガス・水道など）
- ・ サッシ全てやり替え
- ・ 階段の踏面・蹴上拡張及び堅穴区画位置の変更（新防火法対策）
- ・ 間仕切変更及び内装改修（地下、1階、3階）



●研究棟新築及び本館耐震補強・改修工事後の部屋数の変化

	現在	新築、耐震・改修後
学生室 (7.86 帖)	34 室 (本館 2F、3F)	34 室 (本館 2F、3F)
研究者室 (单身)	5 室 (本館 3F) (7.86 帖) 2 室 (本館 3F) (15.72 帖)	12 室 (本館 3F) (7.86 帖)
研究者室 (夫婦)	3 室 (西館) (6.90 帖) 1 室 (西館) (13.81 帖)	2 室 (研究者棟) (15.04 帖) 7 室 (研究者棟) : 4 室 (21.06 帖)、 2 室 (22.06 帖)、1 室 (22.56 帖)

この結果を受けて、約 2 億 5 千万円の資金をどのようにして集めるのか、もし集まらない場合には、どうするのかを決断しておく必要に迫られている。更に、何時から募金活動を開始し、寮生の受け入れの中断などのスケジュール等を検討しなければならない。但し、単に本館の耐震改修だけができて、研究者棟（西館）を解体するので、研究者の部屋数は減少し、収入減となり、経済的な安定は見込まれない。新研究者棟（総工費約 1 億円）も同時に建設して、将来の HdB の運営も安定させたいと考えている。更に、この新研究者棟には、新しい活動基盤としての役割を任せたいと考えているだけに、新研究棟新築は必須である。

11. 西館（研究者棟）の改築と本館の耐震・改修に伴う資金問題について：

HdB の新築・改修を困難にしている理由の一つは、これまでの財団法人の運営方針は、募金で建物を建て、後は寄附金を受けながら運営し、建物の減価償却を考えて積み立てることはなかった。財団法人から公益財団法人に移行する際に、会計でも減価償却を考えるよう指導を受け、研究者棟である西館の改築に向けて、少しずつ積み立てを行ってきた。しかし、建物全体の耐震問題が出て来たことによって、我々も含めた多くの法人が資金難に直面している。

更に資金集めを困難にしているのは、留学生寮を補助する公的制度が無くなっていったことである。かつて留学生宿舍建設を援助していた（財）日本国際教育協会は現在、独立行政法人日本学生支援機構に吸収されたが、「留学生宿舍建設奨励事業」は平成 21 年度に廃止された。また、京都府も京都市も留学生寮の建物の補助制度を持ってい

たが、現在は廃止されている。日本財団も留学生寮への補助金制度を廃止している。但し過去に建設費の一部でも国からの援助を受けた留学生寮に対する補助制度は残っていた。HdB もそのようなチャンスがあったそうだが、独自の「Principle and Purpose」を掲げ、日本人学生も入居させる自由な運営方針を守りたいとして断った経緯があった。

京都府や京都市も「大学のまち京都・学生のまち京都」の推進のため、留学生の受入のための環境の整備を掲げている。当然京都にある大学自体も、例えば京大は 2x by2020 を掲げて、留学生の受け入れを標榜している。しかし、どこも資金難で苦しんでいるのが現状である。そこで HdB は、基本的には民間に頼るしかなく（借金を含めて）、民間会社や、社会奉仕連合団体であるロータリークラブ、ライオンズクラブなど、当然、一般市民からの寄附金などが考えている。（スイス「出会いの家」協会とその活動について「出会いの家」協会（Gesellschaft Haus der Begegnung）を参照 23 ページ）。

12.西館（研究者棟）の改築と本館の耐震・改修にともなう新たな活動について：

新研究棟の建築と本館の耐震・改修により、大学にくる研究者だけでなく企業の外国人も入居できる新研究者棟を建設することによって、社会貢献を考えた新しい活動拠点、①多文化共生拠点、②国際民間企業連携拠点、③コミュニティ防災拠点づくりなどを考えている。この詳細は、嘉田良平理事の「新たな社会貢献をめざして」（19 ページ）と、「研究者棟新築及び本館耐震補強・改修工事支援募金 趣意書」（7 ページ）を読んで頂きたい。

新たな社会貢献をめざして

嘉田 良平

(1971 入寮、HdB 理事、四條畷学園大学教授、総合地球学研究所名誉教授)

はじめに

公益財団法人 京都国際学生の家（以下、HdB と略す）は、今まさに新しい時代を迎えようとしています。HdB を存続させるためには、いつか関西方面を襲うであろう大地震に備えて、本館の耐震補強工事で西館の全面建直しが必須であると京都市から指摘されたからです。では、このような大改修を契機として、HdB はどのように次の 50 年を展望すべきでしょうか。小論では、HdB がこれまで果たしてきた役割を振り返りながら、今後の望ましい姿について、社会貢献という視点から考えてみたいと思います。

➤ 国際交流の先駆者として

HdB は、過去 50 年もの長きにわたって海外からの留学生、とくに京都に憧れを抱いて来訪する留学生達を受け入れる拠点施設として、先駆的かつ重要な国際交流上の役割を果たしてきました。しかし、他の一般的な留学生寮と比べると、HdB の性格は大きく異なります。HdB では、日本の学生と留学生達との共同生活が展開され、日常的な暮らしの協働を通して、そこに集う寮生・研究者達との国際的理解が深められてきたからです。そのことが人間形成に大きく貢献し、有為なグローバル人材を数多く輩出できた大きな要因となったと思われます。

このユニークな理念によって運営されてきた HdB ですが、このような国際交流の場を広く日本全国に、そして世界各国に普及させたい——。これこそが、次の新たな 50 年をめざす私たちの切なる願いです。そのためにも、各方面からの支援と協力を得て、HdB を今後とも存続させるための知恵を絞らねばなりません。

では今後、この HdB を存続させ、有為な人材を世に輩出し続けるために、どのような新しい役割が求められるのでしょうか。次の半世紀、HdB はどのような社会貢献を果たすことができるのでしょうか。おそらく、これまで行ってきたさまざまな国際交流活動に加えて、地域社会との協働あるいは地域貢献をめざすこと、あるいは民間企業に求められる外国人や外国からの研究者を積極的に受け入れたり、地場産業のグローバル化の手助けとなれるような活動を展開したいと願っています。新しく建設される研究者棟において、是非とも HdB に新しい機能が発揮されるような工夫とデザインをしていきたいと願っています。

私たちは平成 27 年度より、この重要な課題について理事会を中心に議論を重ねてきました。そこで出された数々の意見の中から、今後の社会貢献として、次の 3 つの柱がとくに重要ではないかと集約されました。すなわち、

1. 多文化共生拠点
2. 国際民間企業連携拠点
3. コミュニティ防災拠点

という 3 つの方向性です。そこで以下、なぜ今、これらの 3 つの柱が重要であるのか、また HdB として、どのような目的と手法によってこれらの新しい価値を実現しているのかについて、概略を述べたいと思います。

➤ 多文化共生の拠点づくり

2017 年、トランプ米国大統領の誕生とともに、ポピュリズム（大衆迎合主義）と内向きの自国優先主義の潮流が広がる中で、痛ましいテロが多発し、難民が激増するなど、不穏な空気が広がりつつあります。グローバル化の流れに逆行する分断主義によって、国家間に高い壁を構築しようとする動き、人種差別を助長し、他者を排除しようとする流れがとくに危惧されます。このままではテロはますます激化し、国家間、民族間の対立と格差はますます拡大していくのではないのでしょうか。

異文化に対する偏見が多く見られる今こそ、多様な価値、文化・民族・宗教の多様性を尊重し、寛容の精神で相互理解を深めるべきだと私たちは信じています。自分たちが信奉する神こそ唯一絶対のものだという価値観を改め、異文化コミュニケーションを通じて相互理解を深めるべき努力こそが求められているのではないのでしょうか。世界各地でイスラム教が孤立し排除される傾向を強める今こそ、宗教間の対話が求められていると思います。

前述のように、HdB は暮らしの中から多文化共生をめざそうと努力してきました。そこでは他者を寛大に受け入れ、共生・共存の世界をめざそうとする崇高な理念が位置づけられています。つまり HdB とは、生活の場を通して、多様性の価値について身をもって学ぶことができる貴重な場となっているのです。

仏教寺院の本山が多数立地し、世界一の国際観光都市である京都こそが、この異文化コミュニケーションの場として最もふさわしいのではないのでしょうか。そこで、この HdB を宗教間対話を推進する一つの拠点として、また異文化コミュニケーションの集いの場となるように努力していきたいと私たちは願っています。是非、京都市をはじめとする行政の関係者、仏教界・法曹界はじめ、茶道・華道界の関係者の皆さまのご協力を得て、具体的に取組みれば素晴らしいと思っています。

➤ 民間企業の国際連携のお手伝い

地球環境問題がますます深刻化し、世界各地で地域紛争が多発する中、第三世界における貧困と格差はさらに広がりつつあります。中近東やアフリカ諸国からの難民が

増加し、国際的な経済摩擦が拡大する中で、民間企業あるいは NGO・NPO などの果たす役割はますます重要となってきました。

とくに、資源・エネルギー・環境問題の解決のためには、地域の自然と文化を大切にする地場企業の存在は欠かせません。幸い、京都には数多くの歴史的建造物、自然豊かで落ち着いた居住空間、大学や研究機関と並んで、創造的かつ国際的なモノづくりを行う地場企業が数多く立地しています。しかも京都で創業した企業の多くは東京に本社を移転せず、海外から高く評価される“京都ブランド”の基礎を形成してきました。

そこで、これらの地場企業の支援と協力のもと、「京都国際学生の家」においてこのような地場企業間の国際交流を活発化するとともに、これを入寮学生と地場企業との交流を推進する拠点として活用してはいかがでしょうか。そのために、例えば、地場企業の国際交流研修に向けてシェアハウスへの入居という形でご協力いただけないかと私たちは構想しています。また、入寮留学生のインターンシップの機会を企業側からご提供いただくなど、双方向にとってメリットがあるような開かれた運営に務めたいと思います。さらには、地場産業のグローバル化の手助けとなるような、企業の研修生なども入居できる部屋の設置することも検討していきたいと思います。

➤ 地域コミュニティの国際防災拠点として

ある日、突然に起きて甚大な被害をもたらす大地震はじめ、台風、火山の爆発や風水害など、日本列島はまさに自然災害のメッカとなっています。戦後 70 年、日本列島で起きた自然災害は数多いのですが、風速 60m を超す巨大化したスーパー台風が上陸するなど、地球温暖化に伴う異常気象によって、よりリスクの高い自然災害が近年とみに増加してきたようです。1995 年 1 月に起きた阪神淡路大震災や 2011 年 3 月の東日本大震災では、多数の死傷者と避難民が発生しましたが、もちろん京都といえどもこのような自然災害の被害から逃れることはできません。

そのような状況において、「災害弱者」としてしばしば忘れられがちな存在が、大都会に住む外国人や留学生です。つまり、災害発生時に必要不可欠な避難情報や気象予報が、留学生やその家族にタイムリーに届けられないことが多く、しばしば手遅れとなりがちなのです。聞くところでは、大阪市内には 42 棟もの防災マンションがあるのに対して、京都では 1 棟も存在していません。

そこで、京都国際学生の家（HdB）を留学生寮としては京都初の防災マンションとして位置づけ、新たな社会的貢献できないのでしょうか。海外から京都で暮らし学んでいる留学生や研究者とその家族、地域に住まわれている海外からの来訪者あるいは旅行者に対して安全・安心を届ける国際交流拠点として、この HdB を位置づけたいものです。

もちろんその際、京都市・京都府など行政実務者、消防署等との防災連携のもと、研究者、市民（近隣住民）、関連企業、とくにローカル FM ラジオ局、NPO などとの

多様な連携を図ることによって、外国人を含めた地域社会の防災力の向上に寄与せねばなりません。防災・減災のためのネットワーク・情報システムを構築することによって、HdBを日常的な国際防災拠点として位置づけたいと考えております。そのためにも、太陽光パネル、蓄電設備の設置によって、災害時の電気供給ができる状態にしておくことも重要な課題と思われまます。

むすび

HdBはこれまで半世紀の長きにわたって、京都の大学に來られる留学生や長期滞在を必要とする研究者の宿泊・交流施設として重要な役割を果たしてきました。そこで今後、さらに次の半世紀を目途にHdBを存続させ、国際感覚を身につけた有為の人材を世に送り出し続けるためには、研究者棟の新設と耐震補強を含めた今回の大改修は不可避の事業となつてまいりました。

日本列島を襲うであろう大地震に備えて、HdB西館の全面的な建て直しと本館の耐震補強は必須であり、それには多額の資金が必要となります。そこで西館は解体して、大学および京都の地場企業に來られる外国人や外国人研究者を受け入れられる新たな研究者棟として生まれ変わるのみならず、あらたな機能を付加することによって、異文化交流、地場産業のグローバル化の手助け、そして地域の防災拠点として社会貢献をめざそうと努力してまいります。

最後にもう一度、繰り返してお願い申し上げます。今後の事業展開と運営に際して、私たちは最善の経営努力を行っていく覚悟ではありますが、上記の趣旨にご理解をいただき、募金へのお力添えをどうかよろしくお願い申し上げます。

スイス「出会いの家」協会とその活動について 「出会いの家」協会 (Gesellschaft Haus der Begegnung) 1961/1/23

故稲垣 博 前理事長

Gesellschaft Haus der Begegnung (「出会いの家」協会) は 1961 年 1 月 23 日、チューリッヒ市において H. K. Fischer 氏を会長に、K. Winzler 女史を事務長に選んで結成された。その目的は神学者・W. Kohler 氏が京都在任中に温めた「出会いの家」構想を京都の地に具現化するための諸準備、特に趣旨を徹底して募金運動を計画・実施することにあった。スイスの人々のこの意欲について、彼らの平和運動に対する高い意識、そして自国ではなく外国 (日本) のために募金するという彼らの国際性に日本人として敬意を表したい。

先ず募金趣意書が草起され、会則が制定され、これらを記載したパンフレットが作られた。本誌のおもて表紙の図版に、このパンフレットの表紙が転載されていることは既に説明済み (本誌見返し参照)。以下にその趣意書の中で重要な部分の邦訳を記載する。

下記の文章につづき、「共同の生」のキリスト教神学的な理論付けと協会会則が述べられている。後者はここでは割愛する。

以上、現、京都「国際学生の家」創設を目指してスイスの市民団体が、今から 40 数年前に草起した募金趣意書の内容について述べた。そこで気付くことは、創設趣旨の根拠と意義は極めて詳細に一旦し、いささか難解な文章ではあるが一説明されているのに、具体的な募金計画については殆ど触れられていないことである。

このような趣意書を日本で相手に示したとすれば、先ず問われることは「いくら金が要るのか？」であり、その金額が巨大であれば、趣意書には目も留めてもらえないのが常である。ましてや、それが難解な文なら募金活動の失敗は自明である。ところがスイスでは成功したのである！

日本とスイスとのこのような相違は、仮想的とはいえ、誤った見方とは考えられない。そうだとすれば、当財団の今後の運営には寄附に頼ることは可及的に避け、「出会い」に関わる活動に一層の新規さを加え、その意義を心ある人々に具体的にアピールし、結果として納得づくの経済支援が受けられるよう努力するべきであり、これが今後の課題である。

(2005 年 4 月 3 日記)

「出会いの家」創設趣意書 Gesellschaft Haus der Begegnung

創設者 故ウエルナー・コーラ博士記

世界中の人々、なかでもアジアとアフリカの人々は揺れ動いている。伝来の古い社会形態は崩壊し、現代的イデオロギーの使者たちは新たな充実感を与えようと手を差し伸べている。諸大陸、諸人種、諸宗教そして諸国家間の対立が人類史上かつてないほど多発し、その結果紛争が起り、諸民族はそれに直面して軍備を拡張している。その際戦争が破局を招くのは自明のことである。

(だから) 戦争のためよりも平和のためにより多くのことを為すことに価値がある。現在起こっている諸紛争は、(逆説的には) 人類が一体であり、私たち全員が相互に依存し合っていることを示している。連帯は目に見えて具現化されねばならず、紛争の結果、私たちが相互に疎遠になったり、対立して生きるようになってはならない。

「出会いの家」構想はこのことを見据えた一歩である。この一歩は人種を異にする学生と教師が数年間一緒に暮らした、京都の小さな学生寮での経験に基づいている。日本に最初の「出会いの家」の建設が計画され、さらに多くの「家」が世界の各地に必要に応じて建てられ、整えられ、支援されることが望ましい。したがって全大陸に人々の「出会い」を実現する支部を設立することは、当協会の課題である。種々の文化、社会的階層そして信条、また種々の人種、宗教そして世界観に浸ってきた人々が一つの「出会いの家」という、対立と相違の緊張した場で生活を共にする。この家の住人は、対立にもかかわらず尊敬し合い、相違にもかかわらず兄弟同志であろうとする義務を負っている。つまり自己と異なる人々との出会いは、新しい形態をもつ社会の構築を自分たちの国や地域で目指す平和運動に備えての訓練になるとみなされる。そして下記の規約が承認される。

規約：

1. 平和には幾らかのコストがかかる。平和のために言葉によって尽力するだけでは不十分である。戦争にも幾らかのコストがかかる。私たちは戦争に赴く人々の教育費や武器代として毎年何百万スイスフランも拠出している。本当に平和に関心があるのなら、私たちは民族または民族間の平和のために時間、金そして力を投入しなければならない。私たちは平和な共同生活のために尽力すべきである。この共同生活は、相互破壊に至る強大な緊張に直面する場合ほんの小さな寄与にすぎない。属する階層、国家そして人種の異なる人々は、将来彼らの居所で自分らの民族の中とさらに民族間で積極的に平和を築くために、相互に出会い、相互に生活を共にすべきである。

2. このような「共同の生」はそれ自体が目的なのではない。目指す先は日常的かつ人間的な社会なのである。このような社会は（歴史が示すように）常に新たにされる必要がある。社会形態は変化する。古い伝統は衰退し、新たな伝統が形成される。「共同の生」は、変わり行く社会の只中で人間が果たすべきことの実現を意味している。すなわち、人間の行きつくべき先は（単なる社会 - Gesellschaft - でなく）共生社会 (Gemeinschaft) なのである。
3. 「共同の生」とは隣人 (Mitmenschen : 共にいる人々) との関係の中で生きることである。隣人、すなわち、私たちが愛する人も愛さない人も、異なる信念、信条、コンセプト、宗教をもっている人々も、種々の人種、国家、階級そして家柄の人々も。共同生活は自分と異なる人々に対する愛と尊敬を意味する。
4. 「共同の生」とは自由の中で生きることである。この自由は相互愛の自由である。この愛は、私たちがまさに互いのあるがままを受け入れるところに成り立つ。この愛の中で私たちは種々の考えを自由にもつことができる。つまり *<We agree with each other to disagree with each other>* なのである。
5. したがって「共同の生」とは絶えざる改新の中にある生活なのである。というのは、私たちはみんな自らのコンセプト、伝統的慣例、宗教そしてモラルに従って生きる傾向をもっているからである。だから私たちは、この「共同の生」の中で克服しなければならない三つの傾向を次のように区別してもよいであろう。
 - (a) 私たちの家族や親族に対する関係や義務のみを大切にし、それらのみを果たそうとする傾向。「共同の生」は、これまでの家族の在り方を忌避するのではなく、改新することを意味している。
 - (b) 私たち自身と同じ社会的環境にある人々との関係や義務のみを大切にし、果たそうとする傾向。西側世界の伝統的な市民社会もマルクス主義的世界の革命的なプロレタリアート社会も、人間を教育、政治的立場、モラルそして懐具合によって分類する傾向をもっている。「共同の生」は社会的現実の忌避を意味するのではないが、それは階級別に分断された人々を「出会い」に導くものなのである。
 - (c) 私たち自身と見解を同じくする人々との関係や義務のみを大切にするという傾向。この考え方の結果、社会は画一的になる。「共同の生」とは自由に生きることである。それは、画一化や統制に至る傾向すべてを退け、相違、特に隣人が己と異なる存在であることを受け入れるものである。
6. それ故に「共同の生」とは、社会や家族に関する多くのコンセプトの中の一つの新しいコンセプトなのではない。これらの文章は、現実に共同生活している現実の人間について言い換えているだけである。この新しい社会は、保守的でもあるし、革命的でもある。それは、伝統をもった過去を尊重し、可能性をもった未来を見据える。したがって自由に自己批判して自らを新たに作る「生」の形態が問題なのである。この共同生活の基礎は「生」そのものである。

【ハウスの特色と意義】

出会いの家

シュペネマン・クラウス
(HdB 理事、同志社大学名誉教授)

京都「国際学生の家」の内部で使われている呼称は「HdB」です。「HdB」はドイツ語の「Haus der Begegnung」、「出会いの家」の略称です。国際学生の家はこの名称をつけたのは、HdB 創始者の一人であったスイス人、ヴェルナー・コーラー (Werner Kohler) 先生でした。当時、「Begegnung」「出会い」はよく用いられた言葉でしたが、現在では、スイスやドイツの学生でさえこの意味は理解しにくいでしょう。

「出会い」の意味をよく理解しようと思えば、コーラー先生の生涯を見なければなりません。スイス人のコーラー先生は、第二次世界大戦中、中立であったスイスにも実は多くの戦争とのかかわりがあったことを知っておられました。コーラー先生自身も若い青年として戦争を体験されたからです。戦後、コーラー先生と同世代の若者が抱いた疑問は「なぜこの戦争が起こったのか」と言う事と「このような戦争が二度と起こらないように我々は何ができるのか」ということでした。というのは、第二次世界大戦は単なる政治的な国際紛争ではありませんでした。この戦争を引き起したドイツにとって、世界で一番優秀なゲルマン民族の生活空間を拡充するための戦いでした。米英にとって、最大の課題は、西洋の民主主義をドイツの全体主義から守ることでした。要するに、第二次世界大戦は近代における最初のイデオロギー戦争でした。このような戦争が二度と起こらないための新しい考え方、または国家間の新しい相互理解が必要であるというのが、戦後の共通理解でした。この新しい考えを踏まえ、国家間の相互理解を表現するために「出会い」の概念が用いられるようになったのです。

「出会い」は 1920 年代にヨーロッパの哲学や神学に打ち出された概念です。この概念を初めて用いた学者は、個人中心の思考を乗り越えるために、人は決して一人では豊かな人間になれない、豊かな人間になるために他者との深い関わり合いが必要であると強調したのです。第二次世界大戦後、この概念が社会や政治の領域に適応されるようになったのです。国は孤立しては発展できない。発展するために、その国が他の国々との関係や交流が不可欠であるということは、私自身も戦後学校で教えられました。現在、これはヨーロッパの理念になりました。第二次世界大戦後、このような「出会い」の概念を特に強調したのはキリスト教会と教会によって設立されたアカデミー運動でした。戦後ヨーロッパの新しい理念はコーラー先生に大きな影響を与えました。彼にとって「出会い」は政治的な意味合いをもつ平和の最重要条件でした。私自身は、

1964年頃、ハイデルベルグ大学で日本から帰国したばかりのコーラー先生の授業を受け、「出会い」について彼とよく議論した記憶があります。日本人女性と結婚し、将来日本で仕事する予定だった私にとって、この議論は非常に刺激的でした。

コーラー先生は「出会い」の四つの段階あるいは条件を定義されました。

まず、第一に「出会い」の根本的な条件は、自国に対する優越感を克服し、異国や異文化を同等な文化と見なすことです。ドイツの民族的優越感は第二次世界大戦の根拠だったからです。ユダヤ人に対して「反ユダヤ主義」と呼ばれる偏見をもったドイツ人は、ナチ時代にヨーロッパ在住のユダヤ人人口の75%殺害し、或いはその殺害を容認したのです。日本でコーラー先生は、日本にある朝鮮人や東南アジアに対する似通った偏見を経験しました。コーラー先生は宣教師としてスイス・イーストアジア・ミッションから日本へ派遣されました。しかし、伝道活動を行い、日本人をクリスチャンにするつもりではなかったと述べておられます。なぜなら、キリスト教の伝道活動の前提には、キリスト教の他宗教に対する優越があるからです。コーラー先生にとって一番大切だったのは、日本の諸宗教に出会い、その出会いによって、自らも新しいことを学ぶ点でした。

「出会い」の第二の条件は、疑問に思うこと、すなわち異文化を不思議に思い、その固有性や新しさに感動できる点でした。コーラー先生のこの説明は私にとって大変印象的でした。

コーラー先生に初めて出会う前に、私は1年間アメリカに留学しました。当時、ドイツ人にとってアメリカは今では想像できない程遠い国でした。アメリカまでは、船で10日間もかかりました。出発した日の晩、甲板に立ってヨーロッパ大陸が海に沈んで行くのを目にした時には、思わず落涙しました。もうドイツへ帰国できないと考えたからです。アメリカでホームシックにかかった時にも、家に電話することもなく、手紙に返事をもらっても1ヶ月かかりました。しかし、その距離のせいで、アメリカを全く新しい世界として体験することができました。アメリカでの留学は、連日のように新しいことを発見する生活でした。

今日、交通の便、インターネット等通信網の技術発展により、世界は小さくなりました。しかし、12時間でフランクフルトから日本に来、毎晩メールを送り、国際電話やスカイプで母親や恋人と話せる留学生にとって、日本はドイツと違う社会や異文化として体験することが反って難しくなったというのも事実でしょう。

コーラー先生にとって「出会い」の第三の条件は、異国や異文化について学ぶことでした。しかし、これは単に書籍をあさる意味ではありません。コーラー先生の言い方によると、異文化への道具は自分の体です。人と一緒に飲食したり、遊んだりし、要するに、共に生活することによって初めてその人の考え方、物の見方、価値観等について学ぶことができるという点です。本を読むのは、このような体験を後から整理

するためです。ここからコーラー先生の国際学生の寮を設立する理念が生まれたと思われまます。日本人学生と国際留学生がお互いを理解するために、大学で講義を受けるよりも先ず一緒に生活できる場を提供しなければなりません。ここに、今でも京都国際学生の重要な存在意義があります。普通の国際学生寮と異なり、京都「国際学生の家」は単に居住空間を提供する施設ではありません。「出会いの家」は共に生活することによって日本人と外国人の若者がお互いに異文化を理解する場を与える家です。

このように共に生活することは「出会い」の一番深い段階の始まりです。コーラー先生の言葉で異文化との出会いは自分自身との出会いです。当時、よく理解できなかったこの言葉の意味を、私は少しわかるようになりました。日本語を学びつつ、ドイツ語を意識し、日本の社会や歴史を勉強しながら、ドイツの社会や歴史を見直すことができました。または、日本で出会った人の考えた物の見方等を通して、自分が幼時より学んだことを見直し、その弱点を批判的に、或いは良い点も同時に積極的に評価できるようになりました。結果として、自分自身は人間として成長したと思います。これは苦勞の多い、困難な成長過程でした。いわゆる文化は自分自身のアイデンティティーの一部です。これを捨てることは誰にもできません。出来る事は、自分自身と戦いながら人間として少しでも変わることです。「出会い」のこの意味は、約2000年前にギリシャのストア哲学者が直感的に次のように説明しています。人間は同心円に生きている。その中心は生まれた家、町、地域、すなわち自分の故郷です。その周りに自分の国があり、そして他の国や広い世界へと広がる円です。人間は成長するために根を下ろすことができる故郷を必要とすると同時に、故郷から離れて世界の果てまで、歩み、伸びていかなければなりません。ストア哲学は「国際人」の意味を理解していました。日本に生まれ、日本で受けた教育によって文化的に日本人になった人は、アメリカ人になることができない、または文化的にアメリカ人になる必要もありません。ところが、異文化との出会いによって日本人として成長し、異国の人の物の見方や考え方を理解し、その人と力を合わせてグローバルになって世界の問題を解決するために協力できます。

学生通常2年間だけ、共に生活する京都「国際学生の家」では、このような「国際人」を育てることができません。しかし、日本人学生も国際学生もそのような「国際人」になれるように種をまき、刺激を与えることができます。これによって、コーラー先生が考えたように、平和な世界に、現在、および将来亘って貢献することが可能になるでしょう。

(Yearbook Vol.36 より転載)

京都「国際学生の家」の意義

川野 家稔

(1965 入寮)

京都国際学生の家は、1965 年 4 月に開設され、筆者はこの年から 1 年間滞在する機会を得ました。この体験を基に、私の思う「学生の家」の意義を述べて見ようと思います。

京都国際学生の家はスイスの東アジアミッションの神学者故コーラー博士により提唱され、スイスからの財政的支援も得て開設されました。開設に当たっては、日本側では故稲垣博博士の並々ならぬご努力により完成したと聞いています。故稲垣先生は広島に原爆が投下されたその翌日に広島へ入られ、その惨状を目の当たりにされた体験をお持ちで、コーラー博士と共に、世界平和に対する強力な意思をお持ちであったからです。

両先生の思想は、世界平和を実現するためには、国・文化・宗教の異なる人々が共生し、そこで生ずる摩擦にしっかり耐える度量を持つことが基本、との信念でありました。

このことは、文章で言ってしまうえば何でもないのでありますが、決して平和が実現できたとは思われない人類の 2,000 年余の歴史を見るにつけ、また昨今のグローバル化しつつある世界では、ますます重要な教えにもかかわらず、実践は困難極まりないことなのです。

この主旨にのっとり、学生の家では、ハウス・ファーターを含めたチーム組織が作られ、コモン・ミーティングやコモン・ミールなどの行事が行われていることは、開設来 40 年以上発行されている Year Book に詳しく紹介されています。この活動の結果 2007 年 3 月時点で 75 ヶ国 808 名の学生と 87 ヶ国 2,560 名以上の学者・研究者が共同生活をし、その体験を活かして全世界各地で活躍しているのが実情です。私もこの家で経験させて頂いたことが、その後の生活、特にコンフリクトの多い海外での業務遂行に計り知れない恩恵をもたらして呉れました。

世界は好むと好まざるとに拘わらず、環境的、経済的に相互干渉が避けられないグローバル化の方向へ向かっております。このため以前にも増して国・文化・宗教の異なる人々が共生せざるを得ない環境に突入しつつある今、両先生の思想は正に人類が次の 2,000 年以上生きていくための礎となることでしょう。この思想の源となったスイスというお国らしさを改めて感じると共に、是非とも学生を家の活動を継続・発展させ、人類平和の一助にしていって欲しいと願っております。

以 上

(Yearbook Vol.32 より転載)

HdB との出会い

鈴木 松郎

(1966 年入寮)

今から 44 年前(1963 年)、私が京大に入学したばかりの時、食堂に“Rover Scout Club”のポスターを発見し、早速入部するために連絡先の聖護院東町の学生寄宿舎に参りました。(ローバースカウトとは、ボーイスカウト青年部の呼称です)。そこには京大ローバー先輩の立脇氏(現 北原氏)をはじめ、数名の学生が寄宿しており、京大ローバー仲間が入り浸っている様子でした。母屋はスイス・東アジア・ミッション(SEAM)の施設となっていました。敷地内にはボーイスカウト京都第 42 団のスカウトルームもあり、近所の子どもたちを集めて、立脇先輩が隊長をしておられました。京都第 42 団は SEAM のコーラー先生と同志社神学生の内田氏との出会いをきっかけに創立され、SEAM の援助で運営されており、京大ローバーからリーダーを派遣することになっていたようです。これも内田氏と京大ローバー先輩の杉村氏との出会いが契機になったとのことでした。

やがて立脇先輩の卒業を機に、近くの下宿していた私と平岡氏(故人)が京都第 42 団のリーダーを勤めることになりました。当時 SEAM にはフリッツさん・よう子さんご一家がおられ、また 42 団には稲垣先生ご一家も関係され、われわれは色々とお世話になりました。(ようさんは皆の憧れの的であったこと、京大ローバーの但馬小代合宿でフリッツさんにスキーを教えてもらったことなどは忘れられない思い出です。今はお二人とも故人となられたと知り、寂しい思いです。ご冥福をお祈りいたします。) 丁度その頃、学生寄宿舎も取り壊され、代わりに立派な“京都「国際学生の家」: Haus der Begegnung (HdB)”が建設されました。これもコーラー先生、稲垣先生ら出会いを契機にスイス・日本の有志の皆さんのお蔭で完成の運びとなり、留学生、日本人学生、研究者が入寮し、素晴らしい出会いの場となりました。京大ローバーからは 42 団のリーダーに派遣されたメンバーが順次入寮させていただきました(第 1 期 平岡、第 2 期 鈴木、第 3 期 坂野、第 4 期 井下)。

“京都「国際学生の家」”は私にとって、かけがえのない青春時代の思い出の生活場所となりました。コーラー先生ご一家、稲垣先生ご一家と同じ屋根の下で生活し、ネリー夫人、和子夫人という優しい二人のお母さんが出来たこと、また日本人学生ばかりか、タイ・マレーシア・シンガポール・インドネシア・イタリアなど様々な国からの留学生たちと生活を共にして、コモンミール、トリップ、ダンスパーティーをはじめ

め、毎日のように話し合い、一緒に遊ぶことができたことなど、本当に貴重な体験をすることが出来ました。それまで受験戦争を経てようやく大学に入り、単位をとるために受身的に授業を受けるなど、視野の狭かった私にとって、留学生たちのしっかりと自己主張する姿などは見習うべきものでもありました。“京都「国際学生の家」”では国・文化・宗教が違って、人間同士の付き合いができることを肌で感じる絶好の場所でもありました。また異文化を知ることは、かえって自国の文化を認識し、さらに見つめなおす良い契機となるものです。このように私はさまざまな出会いを経験し、有意義な学生生活を送ることが出来、今でも誇りに思っております。

私は卒業後、化学会社の一企業戦士として勤め上げ、一昨年無事に定年退職し、現在は地域などのボランティア活動に勤しんでおります。一昨年には、“京都「国際学生の家」”OMの集まりがあり、稲垣先生はじめ懐かしい皆さん方とお会いすることが出来ました。そして“京都「国際学生の家」”は健在であることを確認し、(故)コーラー先生のご意思が受け継がれていることを嬉しく思いました。またボーイスカウト第42団は拠点を吉田山に移し、スカウトのご父兄の協力を得て地域に密着し、現在も立派に活躍中です。京大ローバーは一時活動を停止しておりましたが、これも一昨年に見事に復活して現在も活動中で、私がその団委員長を務めることとなりました。昨秋京大ローバーの女子学生が“京都「国際学生の家」”に自ら応募して入寮したとの知らせがあり、本当に嬉しく思っております。

国・文化・宗教の異なる人々が出会い、そしてその違いを互いに認識しあうという“Haus der Begegnung (出会いの家)”の理念は世界平和に繋がるものと思います。またその理念はボーイスカウトの理念とも相通ずるものです。未だに紛争の絶えない世界情勢や、地球環境に対応する世界的な協力の必要性など、今日の情勢下で、“京都「国際学生の家」 : Haus der Begegnung”の存在価値はあせることなく、ますますその価値を高めるものと確信いたしております。

<追伸>

この原稿を書き上げたばかりの時、稲垣 博先生の訃報が飛び込んで参りました。先生は広島原爆の惨状を目の当たりにされた後、故ヴェルナー・コーラー先生との出会いと、世界平和を願う思いから、“京都「国際学生の家」”を創立されました。まさに先生はライフワークとして“京都「国際学生の家」”の理事長を勤め上げられました。

ここに先生のご冥福をお祈りすると共に、先生のご遺志を継いで“京都「国際学生の家」”が“出会いの場”をしての意義を高めることを願います。

(Yearbook Vol.31 より転載)

京都「国際学生の家」における生活に関する評価 —他者理解という観点から—

ダニシマズ イディリス (トルコ)

「京都国際学生の家」での最初日を今日のように覚えています。その日は、私にとって様々な夢を胸にして向かった京都での最初の日であり、自分の人生において新しいページを捲った一時でありました。あれよる一年半が経っていますが、当時目指した様々な目標に達していますでしょうか。このような問いかけは、自分の人生において重要な変化が起こるたびに誰でもがすることです。明日ここを離れることになる私も、この寮で過ごした年月を振り返ってみたいと思います。

一年半を色々な角度から評価することが出来ますが、退寮した後もしばらく京都に滞在する予定であり、京都という過程は進行中ですので、この寮での生活のみについて、特に「他者理解」という点に焦点を当てつつ、反省してみたいと思います。

「京都国際学生の家」は、日本人の友達と一緒に色々な国から来た学生がともに暮らす寮でありますので、非常に国際的な空間でありました。これは、海外旅行などの契機で外国を訪れる観光客の異文化との対面と違って、様々な言語と文化を有する個々人の学生を、ありのままの他者として見る機会でありました。地域研究を専攻している私にとっては、この側面は、特に重要でありました。

この寮は、コモンミール、スポーツ・ディのような共に過ごす時間が多かったのです。このような行事は、母国から離れた私たちにとって家族の暖かさを感じるという意味で重要なことであると同時に、他社のありのままを見るチャンスでもありました。私は、他社を見る時に依然から問題になっている先入観と誤解に陥らないように、食事する時や遊び時などといった生活の様々な場面における他者の本当の姿を見ようとしていました。同時に私も他の友達にとって他者になりますので、自分が思い通りに自分の本当の考え方をあらわしたりして、他者によって観察されていました。このように、相互理解を深めようとした私は、考えてみると、他者理解という片一方について少くない体験をしえたと言えます。つまり、他者について毎日新しいことが学ぶことが出来たと言えます。

しかし、一つ心配していることがあります。いったい、私以外の友達が私について正しい見方を持っているのでしょうか。他の皆さんが、私の世界観について正当な知識を持っているのでしょうか。その印象は、否定的あれ肯定的あれもう遅いですが、私にとってこの寮で得た教訓というのは、国際的な空間においては、自分が思うように振舞うのではなく、他者が様々な文化を持っているということを前提に、誤解を起こさないように常に気をつけて他者と接触しなければならないということでもあります。この体験を今後の人生において生かして、自分をも正しく理解してもらおう形で人に接触していきたいと思います。

最期に、別れの挨拶をしたいと思います。ハウズ・パーレンツの方々を始め、事務所と共に寮の様々な行事に携わるほかの方々に、一年半お世話になりましたので心から感謝します。この一年半という期間中、私の発言や行動のせいで傷づいたことがあれば、皆さんにお詫び申し上げながらお許ししていただきたくお願い申し上げます。

(Yearbook Vol.31 より転載)

Lessons@HdB!

#408 Ranjan Kumar (インド)

京都大学大学院 工学研究科

I am writing this article in this yearbook for the third time. In other words, I already stayed in this house for more than two years. The duration of stay made apparently me a matured guy more than before entering house and I can feel now. During my long stay, I came across the varieties of events, met several unique personalities, and collected many exciting memories. Every moment in HdB provided me the opportunity to learn something new through the house tobas and events. So, my learnt lessons are as follows:

1. **It is all about you buddy:** Every resident is essentially a nice as a human being despite coming from the diverse backgrounds. I observed that they are similar in aspirations but their unique etiquette and way to treat others make them more unique. This uniqueness of a fellow resident is priceless and provides you to learn from each other. So, your personality will add a value in this house. Everybody will cheer what you are. You are a bright colour among many other equally bright colours.
2. **Melting pot of youth cultures:** This is more than true. Residents come from different milieu and are all young carrying over special youth cultures. House events provide hot pot to melt their cultures into a single one and become something novel and exciting culture that gives a scintillating joy. You can encounter such phenomena only here, in HdB.
3. **Follow the house rule and house will follow you:** Discipline makes a system systematic and thus life becomes easier. This is exactly happening here. You can be darling of the house if you are a systematic and follow the deadlines. HdB respects one who is disciplined. I like this about HdB.
4. **Cooperative Corporation:** Life is to being social and social is to being cooperative. HdB provides you the testing ground to test this enduring fact. My friend, I tested it and found cent-percent correct. Cooperation is one of the important attributes of living a social life that you can learn in HdB. Cooperation among fellow residents in daily life will give you immense happiness and satisfaction. There is no better place

to learn team work. So, I call HdB is a cooperative corporation!

5. **Think for fellow residents:** Life is difficult if you are studying alone far away from your home. Life isn't smooth always. There are some ups and down. Specially, when you are down you need to have somebody to share your problems and talk to. HdB is a fantastic place in this regards. Personally, I received such back up from many friends living in this house during me shaky moments.

6. **A home away from your home:** The house parent is the guardian of this house in true sense. Residents are the members of HdB family. This spirits bind up your spirit into one HdB spirit which drives the house ahead and will continue to do so in future.

With these lessons, I will go out in the real world and try to follow and to spread the meaning of Haus der Begegnung for the better globalized society.

(Yearbook Vol.32 より転載)

ハウスが教えてくれたこと

レナト・リベラ・ルスカ
(2005年入寮、明治大学特任講師)



2005年度の後期に HdB チームのチェアパーソンを務めさせていただいたレナト・リベラです。当時は、まだ入寮して半年も経たないときでしたが、そんな暮らしをしていて既に数多くのことに気づかされたのでした。それらの教訓をこちらで、三つの点で大幅にまとめさせていただきましたので、ご紹介いたします。

1) HdB での生活は、世界を知ることの良い機会であること。自分と異なる「当たり前」：世界共有の「常識」はありません。様々な考えがあることを知れば、視野が広がり、いろいろ人生に役立つ才能が自然に身につく、コミュニケーションがうまくなるのではないかと思います。こうしてお互いの理解不足による争いなども解決できるようになるはずです。

実は、今だから言える（にも関わらず未だに恥ずかしい）のですが、入寮して直後にコモンミールのときに皆様が「ハラルの肉」のことを喋っていて、何の話かについていけなかったです。「何でブランド品にこだわるのかな」とばかり思っていました。ただの勉強不足の点は当然ありながらも、「ここで実際に実践的に世界と繋がっている」と生々しく感じさせたのは HdB でしたことがはっきり言えます。交流し、絆ができてこそ初めて「異文化」というものを知るものと気づかされました。

2) 自分をよく知る機会でした。自分の生まれ育った環境と異なる背景を持つ人と出会い、その相違を認めた上で始めて自分のことについて理解ができる。自分を定義するのは、他のものと対立してからのことだ。

色鉛筆のケースから「赤を出して」と頼むとき、どれが赤なのかをどう判断しますか。赤以外のものを見て確認してからでしょう、きっと。自分のことも、鏡を見たからといって自分は何者だなんて判断しようがないです。これも全て、自分以外の人間との触れ合いによるものだったことも学びました。

3) ユーモアを持つことの大切さ。人生は、結局ただの冗談ですからね。先程言いましたように、衝突や争いは基本的に誤解から生まれるものであり、私がそこで言いた

かったのはその差を縮めたいというわけではないです。むしろ、それらの違いを大切にすべき。相手から自分の伝統や歴史が変に見えたり、あるいは何かの偏見をもっていたりするというのは、普通のことですし、悪意を持つ差別に至らなければ何の問題もないと思います。私はペルー生まれイギリス育ちで、世界遺産となった遺跡の Machu Picchu やナスカの地上絵などのバカな作業員などによる破壊を見るときも、タクシーに乗ると床に穴が入って道路が見られるときも、イギリスの料理を考えると、本当に笑わざるを得ないです。

これらは全て HdB のおかげで学んだことであり、次なる世代へも同じような人生に役立つ経験を与える機会が多いよう、祈っております。そういった知識にこそ、世界平和への鍵が隠れているように存じます。



(Yearbook Vol.35 より転載)

出会い精神の継承を願って

Abdykadyrova Chinara

(2002年入寮、キルギス出身、ベトナム在住)

2002年の10月に関西空港から大きなバスでいろんな国からの留学生たちと一緒に京都に来た。バスから降りた瞬間、キンモクセイの香りがものすごく印象的で、今でも自分の中で「日本＝京都＝キンモクセイの香り」という風に残っている。

私は、日本の文部科学省の一年間の日本語・日本文化研修留学生(略して「日研生」というプログラムに受かって、京都大学留学生センター所属の日研生として初めて来日した。

京都に着いて、学校が始まるまで各国から来日した留学生たちが、私を含め、住まいを探し始めた。私は運がよく、キルギスの大学で日本語教師をされていた神戸出身の太田先生がすでに帰国しており、先生に京都まで来て頂いて、住まいが見つかるまで面倒を見て頂いた。当時、京都に着いたのが金曜日の午後で、荷物を丸田町川原町の交差点の近くにあった小さな旅館に置いたまま、太田先生と色々な寮や留学生が入居できるようなセンター的なところを何箇所か回った。最後に辿り着いたのが聖護院にある京都国際学生の家だった。ハウスの事務所がちょうど閉館の時間が迫っており、ギリギリ藤本さんにハウス入寮情報を聞き、申込書を頂き、次の週面接に来ることになった。無事に面接が終わり、HdBに入寮した。今思うと、私は本当に運が良かった！

一度も海外に行ったことのない当時の自分はハウスに入寮すると同時にたくさんの人と一気に出会い、不思議な気持ちでいっぱいだった。日本といろんな国出身の学生たちと共有語の日本語で話しながら、ハウスの代表的なイベントであるコモンミールで他国料理を食べて、お互いの文化を分け合って、交流が含まった。当時の私にはこんな交流はあまりにも「エクサイティング」過ぎて、一時期キルギスの家族と連絡するのを忘れていて、心配した母から電話までかかってきたことがある。(笑)

HdBは私にとって大きな家族であった。そこにいつも笑顔で「かわいいチナーラちゃん！」と声をかけて、手料理がものすごく美味しい木戸お母さん、メンバー1人1人の個性を見極めて、そのメンバーにさりげなく最適なアドバイスをしてくださった木戸お父さん、ハウス中をピカピカに掃除する西さん、オフィスの方々が、大人になった今思うと、私たちレジデントが快適に住めるように全力を尽くしてくださっていた。

ハウスで過ごした一年間は私の今までの人生の中で一番充実した一年間となった。HdBは現在の夫であるベトナム出身のPhuc(フク)との出会い場所でもあり、私の人生に大きな影響を与えた。ハウスで出会って、結婚した同期カップルは私と夫以外に

二組もいる。そんな出会いのきっかけとなった HdB を設立した方々に心の底から感謝をしている。また、同期のレジデントたちと今も連絡を取り合っていて、6～8年振りに再会したこともある。

現在、私と夫はベトナム在住で二人の息子がいる。長男の Toan (トアン) が産まれた 2005 年の 3 月に、私たち夫婦の出会い場になった HdB に「出会い精神の継承を願って」小さな木を植えた。当時ハウスペアレントだった木戸家、現在ハウスペアレントである山ちゃんとみっちゃん、朋子ちゃん、メイちゃん、パリとサムナン夫婦、ロン君、クー君、葉子ちゃんともに開いた小さな宴会を今でも覚えている。

HdB はこれからも次の世代から次へと存在してほしいと願っているし、親になった現在、いつか自分の子供もハウスに住んで、いろんな人たちと出会ってほしいと思う。私にとって、HdB は普通の寮ではない。そこには長い歴史があって、人たを繋ぐ大きな縁の力がある。その歴史はこれからもどんどん新しいストーリーを生み出して続いていってほしいと心から願っている。



ゆずの樹を植えた日に集まったレジデントたち。
木戸ハウスペアレンツと記念写真 (京都 2005 年 3 月)



ホーチミン市 (2013 年 1 月)

(Yearbook Vol.38 より転載)

Learning in HdB

#220 Yan Jiang (China)

Center for the Promotion of Excellence in Higher Education, Kyoto University

Confucius said, amongst three people walking, one can certainly be my teacher. I moved into HdB in the spring of 2013. During these past 3 years, lots of people from different countries, with different culture background came and went. I experienced so many good events such as seminars and trips. During these 3 years, I have really learned lots from the HdB people.

I have learned how to cook soy milk pudding and pineapple cake from Oppa and Chika. I have learned from Higuchi-san that “diversity ” not only means sharing happy things with each other but that this also includes the differences and the pain between people with different backgrounds. I have learned how to make a rule through humor but that works effectively from Danielly and the tiny tweezer thing in the shower. I have learned that kindness is to make the one you are helping feel welcomed not guilty from Junta and Naoki when they helped check my Japanese and English. I have learned that to be loved by people is to be kind from Sam who is always prepared to offer help to others.



I also recognized some of my weakness through working with others. For example, after I was in charge of the international food festival, I knew that I should not judge people so quickly. When we were working as a team for the Christmas Party, I found out that I am tempered with the people I don't like....There are really so many learning episodes I got from HdB people during these 3 years.

I have got my doctoral degree for education and graduated from university. I also have to graduate from HdB but my learning will go on.

I want to show my gratefulness to all the HdB people. Thank you so much for teaching me so much. Hope we can see each other someday somewhere.

(Yearbook Vol.40 より転載)

Changes in the past 3 years

#411 Winij Ruampongpattana (Thailand)

Graduate School of Engineering, Kyoto University

As you read this article, if you know me, you may realise and question why this guy wrote again!? (hahaha) Yes, I think I have become one of the students who have been living in HdB for longest time already.

During these 3 years, I have experienced many “changes” in the House. I first stepped in this house as a Scholar since April 2013 and became a Resident in the following semester. That was my first change. To be honest, to stay in this fascinating house for 3 years (or more) was not my plan in the first place. I’ve never imagined myself being a resident for this long.

However, I changed my mind once again because of marvellous atmosphere and an invisible thing called friendship which tied me to here. As we had more and more events and activities together, we got closer to one another. It made me feel like being ‘home’ with a ‘family’ even though we are all from different countries with different backgrounds. As a result, this change enriched my life, broadened my mind, and brought me countless days of joy and happiness. In addition, another important thing I found here that completely changed my boring life in Kyoto was playing pingpong with friends in HdB. At first, as I recalled, we were strangers from different continents but we gradually built our friendship along with pingpong skills with rackets, then we became close dudes, and eventually best friends. This was the most enjoyable time for me and could never be replaced at any cost. Therefore, I could not move to anywhere and I thought living in this international house has been one of the best moments in my life so far, and my second year was also my best year in Kyoto. The only thing which made me depressed was when my friends moved out. Their graduation forced us to say good bye. Anyway, I do believe that our friendship is always with us no matter where we are, isn’t it?

This year, another change was I was assigned to be an advisor by Shiro who was the chair person at that time. I never thought about becoming a part of team members before. However, I learnt a lot about HdB life with this role and better understood how hard-working the previous teams, HP and the office have done so far in order to support every single toban and solve every conflict arising.

Last but not least, I want to say thank you to our house parents, and officers who always take good care of us in every event and of course, you guys for our friendship! Even though some people already left this house and some are going to leave soon, I promise that

such noteworthy experiences we shared together will not be forgotten and will be a vital contributing factor to help me fulfil my life in Kyoto. Sadly, next semester is going to be my last 6 months in this house and my awesome journey here will also end. Although many things keep changing, but nothing can change my feeling toward HdB.

つづく



(Yearbook Vol.40 より転載)

Encounters in HdB

#417 Luca Bergfelder (Germany)

NCC Center for the Studies of Japanese Religions



My name is Luca and I moved into HdB on September 17, 2015. The entry procedure was more than simple, because HdB directory is on good terms with NCC, where I am doing my studies. I am going to stay here until March 2016, and already now I can say that HdB was one of the best things that happened to me in Japan. I have been to Japan already twice before, at the age of 16 resp. 17, and although my stays were always fun, what was lacking were people to talk to that shared the same experience as I did: Being a foreigner in a country on the opposite side of the globe, whose indigenous mostly don't like and/or are unable to speak English. This danger of isolation is confronted by HdB. From the very beginning, everybody accepted me as I was, kindly looking over my mistakes and inpolitenesses. Whenever I needed help, had a question or just wanted to talk to someone, I could find some people around who showed interest in me. Although few of the residents are rather reserved, still there were special occasions when I had the chance to get to know them better, like common meals, sports day, seminar, trip or thanksgiving. Additionally some of us are very eager to spend the nights together and arrange dinners, parties or movie nights. Therefore, the HdB facilities are of great use: The TV, the games, the billiard and the ping pong table as well as the bar are doing a good job. Even the weights downstairs can be used regularly and without difficulties, which is unique for a students' dorm as far as I know (I have lived in three different kinds of dormitories in Germany). Beside the people living here, I am glad to have our house parents, who always and at every time of the day (or night) are there to help us out, and the office, who is polite and friendly and making bureaucracy as easy as possible.

Last but not least it's very convenient to live right next to Kyoto University and Kamogamo River and not far from neither Sanjo nor Kita-Oji, for a price that's more than reasonable.

To summarize up: I have been told about HdB by my Senpai from Germany and got scared about all the obligatory events we have here, but very soon after my arrival to Japan, I was glad to being included in a tight community of students of every age and from all over the world. The last three months, I never felt lonely (what I did a lot when I was in Japan the first and second time), but still I always had enough space and time for myself and my hobbies.

Thanks HdB for taking care of a wretch like me!



(Yearbook Vol.40 より転載)

心と心の触れ合い HdB で

#402 沈 家銘 (台湾)

京都大学法学研究科



私は台湾から京都大学法学研究科へ留学に来た 2016 年 4 月から、京都国際学生の家 HdB に住んでいる。寮生の一員として、HdB の生活を紹介したい。現在、HdB は 10 カ国からの留学生が日本人とともに居住していて、小さな国連のような場と考える。HdB は多文化の融合する場である。

HdB では、各国からの留学生が、日本の文化や生活習慣に慣れてもらうための「架け橋」になるべく、様々な行事に寮生が参加している。

感謝祭(Thanksgiving)には寮生たちはHdBのOBと京都府の要人と一緒に交流し、祝日の雰囲気を楽しんだ。私も代表として、多くの来客の前で「ひまわりの約束」を歌った。このような交流の場を通し、寮生たちは家族のように助け合い、互いの文化を理解し、自分自身成長する。また初めは見知らぬ異邦人同士だった寮生が親睦を深められるよう、当番たちがハロウィンやクリスマスなどのほか、折に触れて寮内でパーティーを企画している。寮生の誕生日会が開かれるころには、すっかり仲良しになる。

国際交流とは何か。心と心の触れ合いではないだろうか。昨今グローバル化が進展する一方、テロ攻撃と領土紛争などに伴い、世界各地でヘイトスピーチや排外主義が高揚しつつある。どのようにして偏見を解決するか。HdB の経験は役に立つと考える。HdB では生活の中で各国文化の多様性を日々経験する。異なった文化的背景をもつものへの理解が深まり、ひとつの家族のように感じる。こうして出来る人と人の繋がりには世界平和の柱である。



HdB の生活

崔 英樹 Youngsoo Choi (大韓民国)

明星大学 教育学部

2014年10月より、レジデントとして入寮しました。気が付けば3年という月日が過ぎ去り、自分が3年もHdBに住むとは思いませんでした。今考えるに、それはHdBでは「共同の生 (Life Together)」と「出会い(Encounter)」という基本理念を掲げており、この理念こそがHdBの最大の魅力であります。私は、この魅力に憑りつかれてしまい、抜け出すことができずに3年という時間を有意義に過ごせたと思っています。



私が入寮したときのHPは

- ・山本夫妻とれんせい君、さとかちゃんの4人家族でした。
- ・次に、アメリカから来た北島HMとJoeHFです。
- ・そして、平成28年より、飯田夫妻（飯田HFとRianneHM）そしてYojiくんの3人家族。

個性豊かなHPが、私たちの日常生活を本当に守って頂けました。皆さまと出会えたことを本当に感謝しております。

HdBでの生活の思い出ですが、、常に誰かが傍にいて、助けてくれる。話かけてくれる、あいさつがある。笑顔がある。衝突がある。秘密がある。問題が発生する。キッチンが汚れるなどなど...

HdBを離れてしまうと、本当に毎日が素っ気なく（刺激的・Excitingではない）、『話す相手がいない生活はこんなにもつまらないものなのか』と日々実感しています。HdBは、国際相互理解を促進しており、本当にここにいるとグローバルを感じることができるからです。そして、ますますのHdBの素晴らしさを再認識しています。

「青春は人生のある時期でなく、心の持ち方である」

これは、私が好きな詩の一節です。私にとって、世界中から集まった才能ある人々と共に生活ができるこの場は本当にありがたい機会と思い出であり、その豊かな感受性の中でずっと素敵な青春時代を過ごせる空間だと私は感じております。

余談ですが、40代になれば「金を払ってでも20代の人々とさまざまなことを意見

交換をしろ」と言われております。本当にありがたい限りです(苦笑)

・HdB の次世代の Resident に伝えたいことは、HdB で素敵な思い出をたくさん作って欲しい。

・HdB の生活で頑張ったことは、Common Meal で美味しい料理を提供すること。

また、自分が cooker でないときでも料理を作ったこと。あと、キッチンの整理整頓、掃除。

・HdB 生活の好きなところは皆が集まってる Lobby。いろんな国の友達ができること

・HdB 生活の嫌いなところは、仲間が HdB を去っていくとき。閑散とした Lobby。

☆HdB の生活を楽しく快適なものにするためのアドバイス☆

1：ハウスイベントにはできるだけ参加する。特に、コモンミールと飲み会？

2：共有スペースは綺麗に使う（台所・シャワー・トイレ・洗濯部屋）

3：暇な時は、ロビーに集まり、仲間と時間を過ごす。

4：思い切り思い立ったときは、皆に声を掛けて、すぐに行動に移す。

私を受け入れてくれた HdB の関係者の皆さま、この場をお借りしてお礼申し上げます。



【HdB を築立って】

Remembrance of HdB and Sakura

Elisabeth Vollenweider-Varga

(Old Switzerland house mother (1988.4-1990.4))

In a few weeks we will leave Switzerland by airplane to visit Japan again after eight years. Slowly I'm getting more and more excited. After a cold January here in Switzerland and a mild February, we feel springtime coming: Our garden is full of snowbells, the days are longer, the light is brighter and the temperature is rising. When we will arrive in Japan we will be lucky to see and experience Sakura one more time.

I was a young woman, when I saw Sakura the first time. I was very surprised to see women and men equally adore and celebrate the delicate pink cherry trees. I liked to see groups of people sit under the trees, picnic, take photos and just have a good time. Before that experience, it never came to my mind to welcome spring, the renewal of nature, with such an awareness and celebration attitude. I got affected by this new approach towards the seasons of the year. Since then I feel the rhythm of the seasons, of the years, of age, of life and of death.

In addition, before my time in Japan I was not able to see the poetry and the beauty of the fallen flower leaves covering the ground like a veil. Up to then the beauty of a flower consisted only in the stage of a flower bud or in full bloom. – It never crossed my mind to celebrate the beauty of a flower, when the leaves were fallen down. I started to keep the flowers longer in my vase to observe and celebrate the beauty of the fallen leaves. I realized how important it was to give attention, respect and gratitude to the whole circle of the life of a flower. And then I understood the importance of this attitude in connection with other things and also with human beings.

Now during our stay we will maybe witness the last period of the HdB-building as we got to know it nearly 30 years ago. We will have the chance to let memories come alive in each corner of the house and fill our souls with happiness and gratitude. The house was host to so many stories. – We will think of all the students and the guests who assembled in this building during our time as Swiss house parents, of the meetings at night, the cooking, the cleaning, the painting, the trips, the common meals, the parties, the chats and the laughter. – My heart will be broken again not to be able to meet Michiko Utsumi, my dear dear friend, who was at my side as the Japanese housemother. She introduced and explained Japan to me in her gentle and humorous way. I could ask her anything and we would laugh together like girls during our common activities. I felt very welcomed. I cannot express how happy she made me with her openness and friendship. I was so lucky and will never ever forget her!

Now with our forthcoming stay in Japan of four weeks we hope to have the opportunity to

renew old friendships and get to know the new generation. I am so curious to see and feel the changes in HdB, in Kyoto, in the Japanese society. I will have the pleasure to introduce Japan not only to our daughter but also to my sister this time.

The wheel of time is turning. Doors close and doors open. So it is with Sakura, with HdB, with dear friends and with us. Let's enjoy every moment of magic and be filled with gratitude, peace and love.

Japan we are coming!

In great expectation and with my warmest greetings.



Welcome Party にて 2017年4月

退職後の生き方を教えてくれた HdB との出会い

置田 和永

(1973 入寮、元ミャンマー日本人学校校長)



私は学生時代に2年間 HdB で過ごしたことが、40 年以上経った現在へと大きな布石となって、私の人生を豊かにしてくれています。

「還暦からが人生ぜよ」と、私が定年退職後自由人となり、新しく青雲の志(@^▽^@)第2弾として選んだのが民主化の道を踏み始めたヤンゴン日本人学校の学校経営でした。そのヤンゴンで HdB 時代の友であるカ

イン・ウー氏と再会することになります。

ある日我が家に彼を招待した時に、彼はアジア太平洋戦争下の日本統治時代に日本軍が発行した少し血の付いたような赤茶色い斑点のある軍票(紙幣)2 枚を何も言わず黙って手渡してくれました。・・・

その頃から私は休暇を利用し、戦後に建てられた日本軍の慰霊碑や連合軍墓地を訪れ、ビルマ戦線で犠牲となった亡き英霊の声なき声を傾けるようになりました。

そして3年間の勤務を終えてミャンマーから帰国し、戦時中連合軍捕虜や東南アジアの労務



泰緬鉄道博物館に建立した平和の塔

者に未曾有の犠牲

者を出し「Death Railway」として揶揄された悪名高い旧泰緬鉄道の終着駅モン州タンビュザヤの町に「世界平和の塔」を建立するプロジェクトを立ち上げ、1年間の目標で取り組んできました。そして岐阜市を中心に賛同者を募って、



「平和の塔」除幕式
願成寺梶田住職による法

私たち日本人が2度と愚かな戦争を起こさないように、また現在もなお少数民族とミャンマー政府との争いが続いている中で、ミャンマーが連邦国家として平和時に国内が統一されることを願って、今年の4月21日、このタンビュザヤの町に新しくできた泰緬鉄道博物館の敷地内に、「世界平和の塔」を建立し、新モン州大臣をはじめ首脳陣を招待して、つつがなくその除幕式・建碑法要を終えました。(除幕式の様子は『自他平等碑』で検索、YouTubeでご覧ください。)

そして今度は旧泰緬鉄道の始発駅に「世界平和の塔」を建てようとプロジェクトを立ち上げました。そこでお世話になったのが、HdB時代の友であるタイ人のクリサダ氏でした。



2013/1/18 安倍総理・泰日工業大学へのご訪問

らい親交を深め、また一昨年彼の来日と合わせてささやかでしたが我が家で旭日章受章の祝賀会もしました。

今回のタイでのプロジェクトでも幸運にも「世界平和の塔建立」の場所も私たちの願い通りに、戦時中旧泰緬鉄道の基幹駅で日本軍鉄道隊の司令部があり、また後に映画「戦場にかける橋」の舞台にもなったカンチャナブリ市のチャイチャムポン寺院の境内にある JEATH 博物館に建立する手続きが早期に完了することができました。昨年のミャンマーでは、同時に反日モニュメントの撤去ということもあって急を要しましたが、今回は少し余裕をもって、今年お亡くなりになったタイ国王の告別式が挙行される2017年11月以降に平和の塔の除幕式をする流れが、クリサダ氏のお陰でスムーズに実現可能となりました。今回は英国・タイ・ミャンマー・マレーシアそして日本の5カ国の賛同者の皆さんにも呼びかけ、日本からも30人ぐらいのツアーを組み、タイ仏式と日本仏式の合同除幕式にする予定です。

彼は京都大学留学時代に日本のものづくりにたいへん関心を抱き、長い間温めていたものづくり大学を「泰日工業大学」として設立し、私立大学として軌道に乗せました。そして2012年の夏、日泰友好に大きく貢献したということで、それまでの彼の功績が認められ、日本政府から叙勲を授与されました。私は彼とはHdBを巣立った後も時折連絡を取り合い、ミャンマーにも立ち寄ってもら



タイ・ミャンマー国境に鎮座する「スリーパゴタ」にて

さて、HdB は昨年創立 50 周年を終え、現在は耐震工事という大きな課題に直面しています。設立当初から世界の共存共栄を願って生まれた「出会いの家」として、ここ HdB で共同生活をし巣立っていった仲間達は、日常生活で自然に身につけた「共生の心」を胸に刻み、現在世界中至る所で活躍しています。

こうした世界の将来を約束する人材を育てていく HdB 、是非この素晴らしい『京都国際学生の家』HdB が、未来永劫に存続していくことを願って止みません。

HdB からフィリピンそして故郷へ

倉田 麻里

(2007 年入寮、(特活) イカオ・アコ現地駐在員)

2007 年度、HdB で仲間と共に生活をした大学院 2 回の 1 年間は、卒業後すぐにフィリピンに飛び立ち、環境 NGO イカオ・アコの現地駐在員として働く大きなきっかけとなった。

私の大学生生活は、山仕事サークル「杉良太郎」と任意法人薪く炭く KYOTO の活動でスケジュールがいっぱいで、ほぼ毎週末、山にイベントに忙しい生活を送っていた。就職活動としては 3 社ほど面接を受けに行ったが不合格に終わっており、博士課程に進むか迷っていた。修士 2 回生の春 HdB に入り、様々な国籍の寮生とコモンミールの準備を行ったり、イベントを企画したりしながら、夜な夜な語り合っていくうちに、それまで漠然と思い描いていた海外生活が具体性を帯びてきた。

そんな中、ある寮生が海外で働くための試験を受けると話してくれた。それで、自分の英語力を試すためにも受験してみようと思った。その後、青年海外協力隊にも応募してみた。しかし、不合格に終わりそれらは自分のやりたいことではないことに気づいた。私がやりたかったのは、サークル等での経験を活かせる NGO での仕事だった。NGO の仕事を探し始めて間もなく、知人からイカオ・アコの現地駐在員募集の記事を紹介してもらい応募を決意。志望動機書を添削してくれたのも HdB の仲間だった。翌週 HdB から面接に向かい、翌々週に採用の連絡をもらったときも HdB の仲間が祝福してくれた。

あれから約 9 年。サークルでの経験や大学で学んだ知識、グローバルな視野を活かし、様々なプロジェクトを展開し、イカオ・アコの成長に大きく貢献した。中でも集大成といえる仕事は、JICA 草の根技術協力事業「流域の森林再生と環境教育—エコツーリズムを導入して—」(2010—2013)。本事業は、森里海連関の考え方を取り入れ、上流部と下流部の住民の交流を通して、流域の森林を再生していこうという取り組みで、自分自身が企画・実施・報告・評価まで関わった。この活動が京都大学名誉教授の目に留まり論文執筆や NPO 法人森は海の恋人のプロジェクト形成にもつながった。他にも、国際協力研修センター事業やオーガニックカフェ事業を開始するなど、活動は多岐にわたっている。

私は今、ネグロスでの駐在生活に終止符を打つべく、帰国の準備を行っている。3 月からは、活動地で出会ったフィリピン人の夫と 2 歳の長女を連れて日本での生活を始める。日本では、イカオ・アコの事業を支えつつ、過疎化が進む故郷を農業と外国人をターゲットとした観光で再生するという大きなミッションが待っている。この新

しいチャレンジにも、世界中に広がって活躍している HdB の仲間が背中を押してくれると信じている。



Embracing 2017

Frédéric Sausse
(Old Member 1972, France)

I stayed at HdB in 1972 and 1973 at the time where Professor Osawa was housefather and I, a student at Kyoto University in linguistics. I met there a lot of interesting people and also created lasting ties. I always enjoyed seeing the house again. My last visit was at Christmas 2006 and I took some pictures of the party (see below). I am a journalist and I publish an online journal based on the cultural events of the Cité Internationale Universitaire de Paris, "saga6t" (saga6t.oveer-blog.com), some of which are in Japanese.

As the theme of the Yearbook 2016 is dedicated to the reconstruction work for the house, I thought it was relevant to present you two stories of La Fontaine that remind us to the need to worry about future. Jean de La Fontaine is a French poet of the 17th Century, I believe, well known by the Japanese for his fables. For some of them he inspired himself from Aesop (Aisospos 7th-6th centuries BC), a Greek writer considered as the father of the fable in literature. I present you two fables, the first: "The Old Man and the Three Young Men" comes only from La Fontaine imagination, and the second: "La Cigale et la Fourmi", is inspired by a fable of Aesop that La Fontaine has enriched, according to his personal style, adding in particular the notion of Christian charity to emphasise its absence.

Among the illustrations I gathered for the occasion, one quite remarkable is extracted from a book of "Fables chosen from La Fontaine" published in Tokyo in 1894 by P. Barboutau, who himself specifies in his introduction: "It is the work of Kajita Hanko, of the realistic school of Yosai (declared during his lifetime by the Emperor the greatest painter of his time), who was asked to paint the Cicada imploring the Ant her neighbour. He represents her so unhappy and in such an urgent need that we cannot help being moved by her misfortune. We do not think the subject can be better dealt with. All the fables illustrated by this master of great talent, though still young, are treated with the same artistic feeling that he expressed in his entire work."



AN OCTOGENARIAN PLANTS A TREE

An Old Man, planting a tree, was met
By three joyous youths of the village near;
Who cried, "It is dotage a tree to set
At your years, sir, for it will not bear,
Unless you reach Methuselah's age;
To build a tomb were much more sage;
But why, in any case, burden your days
With care for other people's enjoyment?
'Tis for you to repent of your evil ways:
To care for the future is our employment!"
Then the aged man replies —
"All slowly grows, but quickly dies.
It matters not if then or now
You die or I, we all must bow,
Soon, soon, before the destinies.
And tell me which of you, I pray,
Is sure to see another day?
Or whether 't on the youngest shall
Survive this moment's interval?
My great grandchildren, ages hence,
Shall bless this tree's benevolence.

And if you seek to make it plain
That pleasing others is no gain,
I, for my part, truly say
I taste this tree's ripe fruit to-day,
And hope to do so often yet.
Nor should I be surprised to see —
Though, truly, with sincere regret —
The sunrise gild your tombstones three."
These words were stern but bitter truths:
For one of these adventurous youths,
Intent to seek a distant land,
Was drowned, just as he left the strand;
The second, filled with martial zeal,
Bore weapons for the common weal,
And in a battle met the lot
Of falling by a random shot.
The third one from a tree-top fell,
And broke his neck. — The Old Sage, then,
Weeping for the three Young Men,
Upon their tomb wrote what I tell.

FABLES DE LAFONTAINE



LE VEILLARD ET LES TROIS JEUNES HOMMES

FABLES DE LAFONTAINE
LE VEILLARD ET LES TROIS JEUNES HOMMES

Un octogénaire plantoit.
Trois jeunes de leur, sous sa plante à son âge !
Disaient trois joyeux, enfants du village :
Octogénaire ! industrie,
Car, si nous des diables, le vous prie,
Dans l'air de ce linceul, (prenez-vous garde) ?
A quel bon chargez vous vie
Ne savez d'ailleurs que l'on peut faire pour vous ?
Et vous pouvez mourir de ce monde malade ?
Mais seriez-vous pas devant cet ombrage ?
Et si vous mourrez, que l'on ne sache
De se donner des soins pour le plaisir d'avoir ?
Cela n'est pas un fruit que le genre humain a ?
J'en puis tout dire, et quelques fois encore ;
Je puis tout dire, et quelques fois encore ;
Le vieillard est raisonnable ;
Plus d'une fois, en son temps,
Il a été en voyage, allant à l'Afrique ;
L'air, et le monde, ont grand plaisir,
Dans les emplois de Mars, et dans les emplois de Mars,
De se donner des soins pour le plaisir d'avoir ?
Cela n'est pas un fruit que le genre humain a ?
J'en puis tout dire, et quelques fois encore ;
Je puis tout dire, et quelques fois encore ;

THE CICADA AND THE ANT

The cicada, having sung
All summer long,
Found herself sorely deprived
When the north wind arrived:
Not a single morsel
Of fly or tiny worm.

She went to plead famine
At the house of the Ant, her neighbor,
Praying her to lend her
Some grain to survive
Until the new season.
'I will pay you,' she said to her,
'Before August, on my honour as an animal,
Interest and principal.'

The Ant is not a lender
That is the least of her faults,
'What were you doing in warm weather?'
She said to this borrower.
'Night and day to all that came
I sang, if you please.'
'You sang? I am very glad.
Well! Dance now.'

I
LA CIGALE ET LA FOURMI.

La cigale, ayant chanté
Tout l'été,
Se trouva fort dépourvue
Quand la bise fut venue :
Elle n'eut plus de quoi manger.
Elle alla se plaindre
Chez la fourmi, sa voisine,
La priant de lui prêter
Quelques grains pour subsister
Jusqu'à la saison nouvelle.
— Je vous paierai, lui dit-elle,
Avant l'été, loi d'animal,
L'intérêt et principal.
La fourmi n'est pas prêteuse :
C'est là son moindre défaut.
— Que faisiez-vous au temps chaud ?
— Dit-elle à cette emprunteuse.
— Nuit et jour à tout venant
Je chantais, ne vous déplaise.
— Vous chantiez, j'en suis fort aise !
Et bien, dansez maintenant.

The Grasshopper and the Ants - Aesop

In a field one summer's day a grasshopper was chirping and singing to its heart's content. A group of ants walked by, grunting as they struggled to carry plump kernels of corn. "Where are you going with those heavy things?" asked the grasshopper. Without stopping, the first ant replied, "To our ant hill. This is the third kernel I've delivered today." "Why not come and sing with me," teased the grasshopper, "instead of working so hard?" "We are helping to store food for the winter," said the ant, and think you should do the same." "Winter is far away and it is a glorious day to play," sang the grasshopper. But the ants went on their way and continued their hard work. When the winter came, the weather soon turned cold. All the food lying in the field was covered with a thick white blanket of snow. Soon the grasshopper found itself dying of hunger. He staggered to the ants' hill and saw them handing out corn from their stores. He begged them for something to eat. "What!" cried the ants in surprise, haven't you stored anything for the winter? "What in the world were you doing all last summer?" "I didn't have time to store any food, complained the grasshopper. I was so busy playing music that before I knew it the summer was gone." The ants shook their heads, turned their backs and went on with their work. Then the Grasshopper knew... It is best to prepare for the days of necessity.



Common Meal Recipe

【Spinach and ricotta cannelloni】

INGREDIENTS	QUANTITY
Butter	500 g
Olive oil	as per need
Garlic	2 heads
Oregano	250 g
Spinach	1.5 kg
Basil	200 g
Tomatoes	1.5 kg
Black pepper	as per need
Ricotta cheese	800 g
Parmesan cheese	500 g
Cannelloni tubes	120
Mozzarella	500 g
creme fraiche (sour creme)	800 ml
nutmeg	

<STEPS>

1. In a pan, melt butter and add olive oil, garlic, oregano, nutmeg and spinach. Cook until the spinach is cooked.
2. Take out the spinach from the pan and allow to cool. Then add olive oil, garlic, basil and tomatoes to a pan and cook well.
3. Finally add black pepper, salt and little sugar so as to finish the tomato sauce.
4. Squeeze excess water out of spinach and chop it. Mix ricotta and parmesan and fill this into cannelloni tubes.
5. To make the white sauce, add pare
6. In a baking tray, pour tomato sauce and place filled cannelloni tubes over it. And pour white sauce over it. Finally sprinkle oil.

【活動報告】

ハウスペアレントとしての最初の1年を振り返って

飯田悠哉(HF)、Rianne Hidding(HM)、洋慈

昨年の3月、前任の北島薫、Joe Philips 夫妻から引き継いで、当時1歳の洋慈とともにハウスペアレントとして家族で3階に移り住んできました。わたしたちはちょうど10年前、HMが留学生として来日してハウスで暮らしていた時期に大学で知り合い、現在に至っています。家族の出発点に関係が深かったハウスに、ことばを話すようになった洋慈が『ただいま〜』と帰って来るのを見ると感慨深いものがあります。

ペアレントとしてのこの一年を振り返ると、チームやオフィス、学寮委員会や山田委員長、内海理事長夫妻に支えられ、何とか乗り切ってきた、というのが正直なところです。イベント準備の手伝いにしろ、コモンミールでつくる料理のレシピにしろ、「模索」という言葉がよく当てはまる一年でした。もちろん法人組織における一つの役割としてペアレントの立ち位置は定まっています。他方で日々の営みのなかでのレジデントやチームとの関係のあり方や、そのほか企画の準備の仕方については、おそらくハウスペアレントがかわるたびに、その都度、引き継がれる部分と、事情に合わせて試行錯誤がなされ、(社会的な意味で)種々の交渉をへて制度化が図られてきた部分がこれまでもあったのだと想像します。とりわけ私たちペアレントは、年齢が比較的レジデントに近いこともあり、また「ペアレント=親」としても経験が浅いこともあって、やりにくさがあったかもわかりません。いずれ一年を終え、「双方ようやく慣れてきたかな」というのが率直な感想です。レシピもマンネリにならぬよう気をつけたいところです。

この間にレジデントである現在の学生たちの社会性の高さに感心させられ、助けられ、励まされる機会が多くありました。それは、国を問わず新旧のレジデント同士で、ときに手を加えられつつ引き継がれてきた共同生活のための知恵や作法に依拠している側面があるように思います。出会いの家であるハウスの住人は半期ごとに少しずつ入れ替わって更新されていきます。しかしハウスのなかにひとつの文化、ひとつの社会性が息づいていることを垣間みます。ペアレントの使命は究極的には(というのも現実的には日々大小の決裁や手配に追われるので...)、レジデントという主役たちのなかで醸成されたこの社会性を尊重し、ときおりHdBの理念を参照項として想起してもらうことに尽きるのではないかと考えるに至っています。

さて、HdBのこの1年間の活動についてはレジデントたち自身による活動報告をお読みいただくとして、ここではこの一年ハウスで過ごす中で今後もう少し注力したいと考えるに至ったことがらを書き出しておきます。ひとつはレジデントと地域との関係に関わります。じつは今年、縁があって聖護院学区の運動会に何人かのレジデント

とともに「聖護院東北」町内会のメンバーとして参加しました。オランダ人やカナダ人やフランス人やマダガスカル人がハチマキをしめて小学校の小さな校庭を全力疾走している姿は壮観でした。優勝争いに加わって白熱し、来年もぜひ、とお声かけいただいています。学生、寮生として生活していると、「ご近所づきあい」は食堂と銭湯以外になかなか経験出来ませんが、運動会ではおなじチームとしての一体感のなかで、町内の方々と交流する姿が見られました。私たちが IFF の際に招待するだけでなく、こちらが住人として出かけていくかたちでも、地域との交流を進められたら素敵だと思います。とくにハウスの面する吉田東通り沿いは「吉田夜市」として夏祭りが催されるなど最近すこし元気な(?) 場所になろうとしています。レジデントが学生でも寮生でもなく住人としてそのような動きに関われるようになれば地域にとってもハウスにとっても実りが多いのではないのでしょうか。

もうひとつはスカラーに関わります。ハウスに暮らして改めて思うのは、ハウスには世界各地からレジデントはもとより、スカラーとして各分野の著名な研究者や芸術家の方々が滞在されるということです。ロンドン東洋学院の哲学者や iPS 研究所の生命科学者、前衛アーティストの方など、それこそ多様な分野で活躍されている方々がひとつ屋根の下にいて、ロビーでビールを飲んでおり、話しかければ話せるという、学生であればこのうえなく恵まれた環境にあるのだと気付かされます。無論、現在もレジデントと比較的年齢の近いスカラーとのあいだには現在も日常的な交流はありますし、トリップやパーティーなどの企画にともに参加してもらうこともあります。ただ、そうしたいわばインフォーマルな交流からもう少し推し進めて、それぞれの専門上の蓄積を今一度、レジデントやペアレント含めハウス内外の専門外の人々に向けてロビーで話をしてもらうような機会がつかれないか思案します。ハウスの歴史のなかにはそのような営みもあったことかと思えます。手始めに毎期に行なっているセミナーをそのように組み替えていくのもひとつの手でしょう。いふなればせっかくきたスカラーをもう少しハウスの活動にひっぱり込み、組み込めないかと思案するのです。よく言われることですが、専門に入り込めばこむほど、なかなか多分野の専門家の話をきく機会は貴重になるという実感があり、ハウスではそれを実現できる潜在性をすでに有していると感じます。それはきっとスカラーにとっても有意義な機会になるものと思えます。どのようなかたちで実現できるか、まだまったく考えていませんが、そうした活動の積み重ねは OM とならんで世界各地にハウスのゆるいネットワークを形成していく一歩にもなっていくのではないかと考えています。そのような交流も、ハウスの次の 50 年に繋げていくうえで重要になってくるように思います。

越して来た当初は片付かぬダンボールのなかにすっぽり収まって隠れて遊んでいた洋慈も、この一年でぐんぐん大きくなり、ことばも達者になって最近はレジデントに遊んでもらって嬉しそうにはしゃいでいます。新たな学期をまえに、洋慈とレジデントたち、そして自分たちのさらなる成長を願って筆を置きます。



Rianne Hidding (HM) はオランダフリースラント州で生まれライデン大学で日本学を専攻し、学部、大学院ともに1年ずつ、研究のために京都大学へ留学して来ていた。ライデン大学へ修士論文を提出後、日本に戻って働きはじめて現在に至る。(2006-2007 在寮)

飯田悠哉 (HF) は東京生まれ、京都大学へ入学後、修士博士課程ともに農学研究科にすすみ、非常勤講師や学振研究員として現在に至る。

洋慈は2014年6月19日生まれ、もうすぐ3歳で京大のそばの保育園に通う。電車と汽車と踏切、ダンスと唄と保育園の友だちが何より好きである。

2016年度 活動表

【前期】 Chairperson: I-Ting Liu(Soraya) Vice-Chairperson: Hidemi Nakayama
 Accountant: Hibiki Murakami Secretary: Mana Imaizum
 Advisor: Kosuke Onishi

4月 9日(土)	歓迎会	Welcome Party
4月 22日(金)	コモンミール	Common Meal
4月 23日(土)	スポーツデー	Sports Day
5月 13日(金)	コモンミール	Common Meal
5月 27日(金)	コモンミール	Common Meal
5月 28~29日	旅行	Trip
6月 10日(金)	コモンミール	Common Meal
6月 11日(土)	セミナー	Seminar
6月 24日(金)	コモンミール	Common Meal
7月 9日(土)	国際食べ物祭り	International Food Festival
7月 10日(日)	大掃除	Cleaning Day
7月 22日(金)	コモンミールと選挙	Common Meal & Election

【後期】 Chairperson: Hidemi Nakayama Vice-Chairperson: Jinzhi Won
 Accountant: Shoishi Go Secretary: Sarasa Amma
 Advisor: Christopher West

10月 8日(土)	歓迎会	Welcome Party
10月 21日(金)	コモンミール	Common Meal
10月 22日(土)	スポーツデー	Sports Day
11月 4日(金)	コモンミール	Common Meal
11月 12日(土)	感謝祭	Thanks Giving Day
11月 18日(金)	コモンミール	Common Meal
11月 19~20日	旅行	Trip
12月 2日(金)	コモンミール	Common Meal
12月 17日(土)	クリスマスパーティ	Christmas Party
12月 18日(日)	大掃除	Cleaning Day
1月 13日(金)	コモンミール	Common Meal
1月 14日(土)	セミナー	Seminar
2月 3日(金)	コモンミールと選挙	Common Meal & Election

Welcome Party Speech (前期)

前期 Chairperson I-Ting Huai-Ching Liu (Soraya)

“Your well-being is our priority, and communication is the key.”

皆さんこんばんは。ようこそ HdB へ。私は今学期のチェアパーソン、ソラヤと申します。よろしく申し上げます。

Good evening everyone. My name is Soraya, and I'm the chairperson for the spring 2016 semester. This year, we have new residents, new scholars, and also new House Parents with a House Kid living with us! On behalf of the team, I would like to give you a warm welcome to HdB.

As you may already be aware of, HdB has many rules, events and duties, which can sometimes seem quite a lot to people at first. But I want to ensure you that HdB is not just about the rules and the duties. What's more important, is the connection you will share with other people. You will make friends through these activities that you plan together. You will encounter people from different cultures. You will share experiences, create laughable memories together. It's about being part of a family.

As members of the team, our job is to provide a platform for you to connect. We have an official event once every 2 weeks, and we encourage any unofficial events in between. If there is something you would like to do, such as a movie night, games night, study group, running group, or just want to have a party, you are more than welcome to propose it in the Facebook or Line group, or talk to us if you would like us to do it for you. On the other hand, if there's anything bothering you, whether related to HdB or not, please don't hesitate to let us know. Your well-being is our priority, and communication is the key. If my Japanese is not good enough, the rest of the team members speak fluent Japanese and English, so please feel free to share your opinion and communicate with us.

Special thanks to the many people who helped made this Welcome Party possible. Some of our residents: Sam, Ellen, Oppa and Gauhara have volunteered to cook, and our House Parents and HdB staff, Higuchi San, also helped the team prepare some wonderful dishes. Jennifer has made a video to introduce you to life in HdB, which we will see later. We hope you enjoy the party, and will enjoy the rest of your stay here. Thank you!

Welcome Party Speech (後期)

後期 Chairperson Hidemi Nakayama

Good evening everyone. And welcome, or welcome back to HdB. Since this place is called “house”, the team would like this place to be where you come back, where you stay with your family and where you can be yourself. And we’ll offer anything we can to ensure it.

By the way, my name is Hidemi, a chairperson at this moment. Precisely a year ago, I didn’t imagine this place would be such a huge part of my life. I was actually on the side to be welcome, feeling quite nervous and worried about everything; people, toban, amenity all about this place. That was my case. Then what were you thinking about HdB before you come here? The place you are obliged to work for? The place troubles you by noises and dirty kitchens? Or the place you have to keep clean, otherwise somebody becomes very freaky like me? As a matter of fact, that’s all true, though not essential. HdB is the place of enlightenment. We offer many chances like toban, a duty you must accomplish, and your turns to cook for Common Meal etc. At the beginning you may be afraid or just want to be lazy. Never the less, you will be enrolled to our community whether you like it or not through those chances, and can’t prevent yourself from being impressed by how awesome our people are. You’ll start learning their mind and capability to bring betterment into yourself. Simultaneously, you are the person who is providing betterment into us.

Before the official beginning of the party, let me take another minute to say my gratitude to my “awesome” people. Our great team members and voluntary cooks who prepared yummy food for us. Higuchi-san and Shimizu-san who arranged everything for the party. HP who have been taking care of us. And everybody who helped us in many ways. Thank you very much. And once again, thank you all for coming, and welcome to HdB.

Common Meal (前期)

当番代表 Kyungmin Lee

コモンミールとは、寮生達が友好を深め、異なった国々の文化を理解する為の夕食会です。二週間に一回の Common Meal 当番は頻度が多く、決して楽な仕事ではありませんでした。しかし、当番を終わって振り返ると、この Common Meal というイベントは HdB にとって欠かせないものだと感じており、我ながら良い仕事をしたと思います。

皆が同じテーブルで顔を合わせて様々な国の食事をとる（しかも低価格で）、そして何人かは招待客がいて、初めて会う方もいる。このような定期的に訪れる、アットホームで新しい出会いの場のある Common Meal は本当に素晴らしいなと感じています。

普段から料理をしていない人も、このイベントの時ばかりは自国の伝統料理を振る舞おうとし格好つけようとする、これは HdB レジデントあるあるですね。50 年前に HdB が始まった頃のレジデントもそうだったのかな。

これからも HdB を象徴とする Common Meal を長く続けていってほしいと思います。



Sports Day (前期)

当番代表 Sarasa Amma

On 26th April, Our house HdB had “Sports Day” and this event was actually the first events in all of another events.

We had “Water fight” for this year.

What is the water fight? It’s a sports using water guns, water balloons, buckets and you can win if you could make the opponents team more wet with their wearing water aprons.

Luckily we had really sunny day on the day. Our souls and passions were getting warmer and warmer regardless of our wetted body by the water.

We used the calligraphy papers so some players lost their papers in 1mins so sometimes we did the judgement not how those two teams wet but we did judgement how much the papers left. (this is unexpected situation. sorry)lol

Moreover, some too passionate players tried to do unexpected penalty like picking the paper aprons of the opponents team or hugging with opponents team members lol

The judgement of the game was done by sports today but this was so difficult especially in the close game.(hope it was right judgement for you all)

It was first time for us to make planning the event from the beginning so it was a bit of tough to decide what kind of sports should we play? What kind of weapons are good for the water fight? How we order the pizza and which pizza should we do on the day?and so on. We sports today were a little nervous for the reasons above firstly until the day but our anxiety soon disappeared to see the players enjoying faces in the game!!!! (Actually I really wanted to join you guys but I had to do judgement instead><) p.s. I got wet with the least team as a penalty tough lol

Hope this sports day event could be a good exercise, or good way to communication with other residents throughout the sports.

We would like to say ‘thank you’ to all of the HdB members.

Special thanks

Thank you house parents for your cooperation and understanding, thank you for joining the rehearsal before the game. Thank you volunteers people for taking many great photos on the sports game. Thank you for all of the participants for showing your passions and souls and making the game more exciting.

See you again at next sports day!!



Seminar (前期)

当番代表 Chiaming Shen

セミナーは国際学生の家で恒例のイベントである。セミナーの場を通じて、各国の伝統文化を交流することができる。千年の都である京都の伝統文化は魅力的なので、今回のセミナーである京都流の華道を企画した。今回の先生は草月流派の並河青玲先生である。草月流は1927年に初代家元勅使河原蒼風によって創流された生け花の流派であり、自由で前衛的な作風を特徴とする。短い2時間の中で、並河先生は20人の国際学生を家の寮生たちに生け花の文化と芸術を紹介した。そして寮生たちは生け方を身につけた。皆さんは活気ある雰囲気の中で生け花の楽しさと文化の深さを満喫した。

Seminar is one of the most important events in HdB. People from different countries can learn the traditional culture through Seminar. Kyoto boasts its historical ruins and traditional Japanese culture. That's the reason why we held the Ikebana (flower arrangement) event in HdB. We invited the professional teacher from Sogetsu school (草月流). Sogetsu is a school of Ikebana, or Japanese floral art. Sogetsu typically uses either a tall, narrow vase such as one made from a bamboo stem, or a flat, open dish in which the flowers and branches are fixed in a hidden kenzan spiked support. However, other forms are possible, including highly elaborate creations that fill an entire hall. One of Sogetsu central ideas is that an arrangement should have three strong elements, each with certain proportions and arranged at a certain angle. But there is considerable latitude to work with whatever materials are available and to express the spirit of the moment. The school was founded in 1927 by Sofu Teshigahara. It is currently led by Akane Teshigahara, the founder granddaughter. Noted practitioners include Master Instructor Koka Fukushima, whose masterclasses worldwide have received acclaim in floral art circles. Everyone in HDB learned the traditional flower arrangement culture. We really appreciated the teacher's lecture.



Trip (前期)

当番代表 Ji Seul Park

トリップは異なる背景（国籍、文化など）を持ったHdBの仲間が2日間活動を共にできる貴重なイベントである。今回のトリップの目的地は、亀岡市にある七谷川野外活動センターというキャンプ場だった。土曜日の朝9時半ごろにみんなでHdBを出て、ワクワクしながら亀岡市へと向かった。キャンプ場に入る前に、トリップの大イベントの一つとして保津川半日ラフティングツアーに参加した。私みたいなラフティング初体験の人が多かったが、インストラクターの方々のとても丁寧な説明を受けみんながラフティングに挑んだ。最初に漕ぐ練習を終えて、亀岡市の大自然を楽しみながら川を下り始めた。川を下っていく途中でいくつかの激流を乗り越えたり、流れが穏やかなところで水に入って泳いだり、岩の上から川に飛び込んだりしてとても楽しい時間を過ごすことが出来た。みんなで息を合わせて漕ぐのはすごく印象的で、素晴らしい体験だった！



International Food Festival

当番代表 Christopher West

The 9th of July saw the return of one of HdB's most cherished traditions – the International Food Festival (IFF). Every year, we invite our neighbours into our home to taste a variety of flavors from around the world and to thank them for their continued tolerance of our existence. Once again, the house pulled together to make the vast array of dishes on offer, with the passion of the representatives for their offerings matched only by the enthusiasm of the helpers. Together, we worked long into the night (special mention to Sam for giving up his birthday evening to marinate Chicken) and made enough food to buckle the tables. In total, 12 countries were represented: China (Sago Soup and Boiled Pork Burger), Taiwan (Bubble tea and Tofu Pudding), Korea (Potato and Kimchi Chijimi), Madagascar (Godrogodro, Mofo anana and Akoho saosy), Brazil (Torta de Bolacha and Farofa de Banana), Czech Republic (Ovocne Knedlicky), Greece (Chicken Souvlaki), France (Crepes la Confiture), England (Carrot Cake and Scones), Sweden (Semla), Finland (Brita Cake) and India (Paneer Tikka). With such a variety of foods on offer, you might be forgiven for believing that some unpleasant flavour combinations might have occurred. What do you get if you mix boiled pork, paneer tikka, chijimi and banana? Fortunately, no food remained on anyone's plate long enough for us to find out!



Cleaning Day (前期)

当番代表 Akanksha Tyagi

In India, we have a very famous saying which translates to “Cleanliness is next to godliness” in English. So, before any festival (which in India is almost every month), the cleaning of the house and its neighborhood are very important part of the preparations. And that was the only image I had about clean-up “festival coming up? start cleaning-up!” So, I was very surprised to see that in the list of annual house events of HdB, there is something called “BIG Clean-up” or おそうじ, that too twice in a year.

It is the duty of the house keeping toubans to organize this event. The event usually starts around 10 in the morning and lasts till noon. Residents are divided into small groups and major places of the house like lobby, laundry room and the kitchens on each floor are cleaned. The event ends with a lunch, provided by the toubans, which is usually a pizza party (and yes we get to choose our pizza before the event).



Common Meal (後期)

当番代表 Kaori Yoneto

様々な文化やバックグラウンドを持つ人たちと同じ釜の飯を食う。コモンミールを通して食は国境を超える素敵なコミュニケーション手段だなと感じました。それぞれが懸命に考え、試行錯誤しながら作った料理を披露し仲間たちと味わう中で、相手を受け入れ理解するきっかけも生まれ、異文化交流も広がっていくと思います。

レシピの回収やハウスペアレントと相談しながらのレシピの調整、当日の司会など慣れない仕事に戸惑うこともありましたが、同じ当番のメンバーや、周りの人の協力により毎回のコモンミールを無事に行うことができ、皆の楽しそうな顔を見ると嬉しく、ほっとします。

毎回新たな発見や出会いがあり、親睦も深めることができる楽しいコモンミールですが、賑やかな食卓の裏では事務員の方をはじめ、黙々と皿洗いなどの後片づけをしているレジデントの姿が少し気になり、上手く片づけの指示ができなかったのが当番としての反省点です。今後はなんとなく固定になってしまっている片づけメンバーだけでなく、皆が協力して片づけができるよう、当番が上手く声掛けをできたら更に良いコモンミールになると思います。

	Main	Main	Vege	Side dish	Dessert
10月18日	トッポキ	Green beans oven dish + Rough Puff Sausage	Stuffed besan cheela	シーフードトマト クリームライス	ナポリコーヒーケーキ
11月4日	flying potatoes	スジェビ	レンチル豆のスープ	ひよこ豆のカレー	ウォールナッツブラウニー
11月18日	肉じゃが	シェパードパイ	ミートボール	鍋	ブルーベリーケーキ&パイ ナッブルキャラメルケーキ
12月2日	プルコギ	キムチ鍋	キーマカレー	トマトの卵とエビ の炒め物	オレオクリームチーズケーキ

後期のコモンミールの献立です。どれもレジデントの文化や個性にあふれ、本当に美味しかった！ありがとうございました！

Sports Day (後期)

当番代表 Yijun Chen

今回のスポーツディは運動ができない人、体格が小さい人でも楽しめるように自分達で4種類のゲームを作りました。さらに今回は雨でも実行できるように、室内運動の企画でした。

朝 10 時にロビーに集まり、スポーツディのセッティングを始めました。そして、10 時半にスポーツディが始まりました。最初の項目は二人三脚+ブラインドシュークリーム喰いでした。その次はミニボーリングで、これは遠距離からボールを投げて小さなボーリングピンを狙うゲームでした。次のゲームは最も盛り上がった風船ファイトというゲームでした。10 回ぐるぐる回転してから、敵対チームの足につけられた風船を潰すルールでした。AチームとBチームの生き残ったアカンクシャーさんと呉さんは連合し、Cチームとの試合を繰り広げていました。

最後のゲームはみんなに少し頭を使わせて、時間内に何枚クリアできるか予想してもらい、その要求したカードの枚数を目指してジャンプして天井にカードをつけるゲームでした。

全ゲームが終わった後、全員で予約したレストランに移動しました。そこで美味しい和食を楽しみました。

最後はもちろん全員の記念写真でした。



Thanksgiving Day

当番代表 I-Ting Huai-Ching Liu (Soraya)

HdBの感謝祭は「収穫を祝う」感謝祭ではなく、HdBを支えてくださっている方、お世話になった方々をお招きして、食事やパフォーマンスを通して日頃の感謝の気持ちを伝える場です。今年の感謝祭は11月12日に開催されました。当日の五時半ごろからレジデントの皆は背広とドレスでゲストたちと挨拶しました。私は司会の一人として皆さんに座ってもらい、その後、六時に始まりました。寮長の挨拶とゲストたちの自己紹介の後、内海先生からのスピーチをいただきました。前のハウス・パーレンツもいらっしゃったので、乾杯する前に一言お願いしました。12人のレジデントと現在のハウス・ファーザーは事前に工夫して色々な料理を差し上げ、ゲストたちを喜ばせてもらいました。ホワイトボードにはレジデントたちがゲストの方への感謝するメッセージが掲示されていました。レジデントたちと交流しながら美味しい料理を味わい、楽しい時間を過ごすことができれば、と当番たちは思って感謝祭を計画しました。

七時半ごろで、待ちに待ったレジデントのパフォーマンスが始まりました。三つの曲があって、皆よく頑張って練習しました。トップバッターはケンジの歌とリンカのピアノで演奏する「ひまわりの約束」でした。ケンジはその曲が好きで、ゲストたちも知っている曲なので、共鳴きると思いました。次は四人の女性たちが歌う、映画「天使にラブソング」からの「I will follow him」でした。この曲を合唱できるため、二週間で皆何回も練習しました。ゲストたちを楽しい気持ちにできたので本当に嬉しかったです。最後の曲はアレックスと仲間たちによる「Let it be」でした。ピアノもフルートもバイオリンもあり、大勢の演奏でした。最後に、HdB生活のビデオを流し、ハウス・パーレンツからの挨拶で感謝祭は終わりました。ゲストたちは満足している顔で帰りました。

レジデントたちが書いた感謝のメッセージをいくつか紹介します。

「いつもサポートしてくださり、ありがとうございました。言語のかべ、文化のかべと色々大変なことが多いですが、貴重な体験、経験ができています。」

「いつもHdBの生活を支えて下さって有難うございます。お陰様で毎日楽しく過ごせてます。」

皆さんお世話になりました。ありがとうございました！

Trip (後期)

当番代表 You-Shan Tsai

• Saturday, 19.11.2016

We all woke up early in the morning. It rained quite heavily. Everybody of our members was still tired influenced by last night's common meal. Some of us enjoyed a party at the outside of House late at night. Nevertheless Hibiki knocked out our room doors at exactly 8:30 and a few minutes later we all had our bus tickets in our hands and started our trip to Wakayama City. We walked to the bus stop at Kumano Jinja with our umbrellas and went to Kyoto Station, where we got the JR train to Wakayama. At Kyoto Station we already felt excitement about our trip to another city in Japan. The train was so crowded that it was quite a challenge to keep us all together to Wakayama Station. At one moment we had lost our Housemother and Yoji, we could find them fortunately. When we arrived at our destination, the rain had stopped.

The first thing we did in Wakayama City was visiting Wakayama Castle. This castle was built in 1585, but destroyed by the bombing of the Allied Army during World War II and rebuilt in 1958. It has been open to the public as a symbol of the city since then.

The view from the top of the castle was wonderful. We could see the Sea, Wakayama Town and the autumn color leaves of all the trees surrounding the castle. After seeing the inside of the castle we played a very funny hunting game on the grounds of the Wakayama Castle Park. All of us were put to specific groups in which we had to play some roles. During the games we had taken photos with a ninja style. The first group won the game. After that we visited other several spots of the park. Once we finished the game, it was time for another funny experience, which was to dress like a real ninja. Every one of us got dressed up like a ninja and then we took thousand pictures acting as a ninja walking around the castle.

In the evening we finally went to the guesthouse where we stayed the night. The guesthouse called Saika Guesthouse was an excellent one for our big group. It provided us a well-equipped kitchen and dining room. The trip toban decided to have a nabe cooking (a cooking in a pot) for dinner. So one group went out to the supermarket and bought food for a delicious nabe. As soon as all the ingredients for nabe arrived in the guesthouse's kitchen, our residents worked amazingly like bees to prepare for the best nabe that HdB trips had ever tried. We had three tables, pots and gas stoves, we divided into three groups and ate it in three different nabe pots. There was one really spicy pot, two normal ones contained no pork. As we had plenty of delicious ingredients, we all got so full and happy. Our lovely evening finished

with the celebration of a birthday of one resident. It was the 20th birthday of Mr. Sohma. We made him drink one bottle of Smirnoff Ice at once and after that we had cake, snacks and drinks together. Getting tired at the night, we slowly went one by one to sleep with satisfaction.

• Sunday, 20.11.2016

The next day started very early in the morning. We were preparing for breakfast at 6:30 and left the guesthouse for an amazing trip to Tomogashima Island at 8 o'clock. The island was once a military stronghold and is full with ruins of former weapon batteries. We took the ferry from Kada Harbour at 10 o'clock arrived there about half an hour and made hiking in the Island to discover its mystical ruins. We took the ferry back to the harbor at 3 o'clock and finally came back to our home, HdB.



Christmas Party

当番代表 Anika Arenz

The Japanese style Christmas Party of 2016 was a successful event. Thanks to the help from the residents, staff, the Toban members and other participants, everybody enjoyed the event.

So it started with a short Welcome message, but everybody couldn't wait to try the heartwarming home cooking by the residents. It was so delicious. After the meal we all enjoyed the entertaining performances of Christmas songs and of course especially the sweet “Christmas girls” with this awesome Shibuya-dance.

After a little break we started some funny games (for example: Paper-folding-dance and Limbo) which brings the residence closer together. And it was really fun!

After that we hurried up to clean up the dishes, because we all were so exciting of our secret Santa gift and to find out who was each secret Santa. Christmas spirit were in the air and filled up the room, so our real Santa (Chris) could appear and bring us our gifts.

Thanks to everyone that everybody gets his gift and felt the lovely Christmas feeling.

As shown in the pictures below, everyone had a smile in his face, felt happy to be part of such a wonderful party and be together with friends.

Thanks to you guys which shown us a great performance, participated the games and made the evening unforgettable.

Thank you also to everyone who was involved into the party and thank you HdB for such a heartwarming time.



Cleaning day (後期)

当番代表 Chiaming Shen

ダンスパーティーの次の日に大掃除。皆様が来ていただき、ありがとうございました。

私達は掃除の役割分担決めの大変な部分を担当し、最初は心配だったけれど前期の当番の方や他の寮生たちが助けてくれたおかげで、きれいに掃除ができました。さらに、よごれを取るとき、寮生同士で励ましあったくれたおかげで円滑に行い、時間通りに終わることができました。

掃除が終わって後の HdB 京都国際学生の家は前よりもピカピカになり、掃除をした甲斐があったと嬉しく思いました。

Big Cleanup は無事に終了して、心も掃除されました。

新しい HdB を迎える準備ができました。



Seminar (後期)

当番代表 Alexander Van-Brunt

This year for the seminar we had a session in Aikido. Loosely translated as ‘the way of the unified spirit’, this is a purely defensive Martial developed in Japan in the 1920’s which focuses on ways to redirect the energy an attack to render it harmless. It is particularly known for its emphasis on not harming the attacker. This decision came after a variety of considerations was put to a vote before the dorm.

After a lot of last week angst about the details of where to do it, and a lot of time spent specifying the right pizza, we finally had a plan. We invited five students from the Aikido circle from Kyoto University. Upon giving us a small speech about the nature of Aikido, we split into groups of two people each. For the next hour and a half we practiced a variety of grabs and subduing techniques against an attacker. Three weeks later at time of writing my hand still hurts from being tested on. But it was worth it for the interesting insight into this martial art, and for some time afterwards people were still practicing these grips.

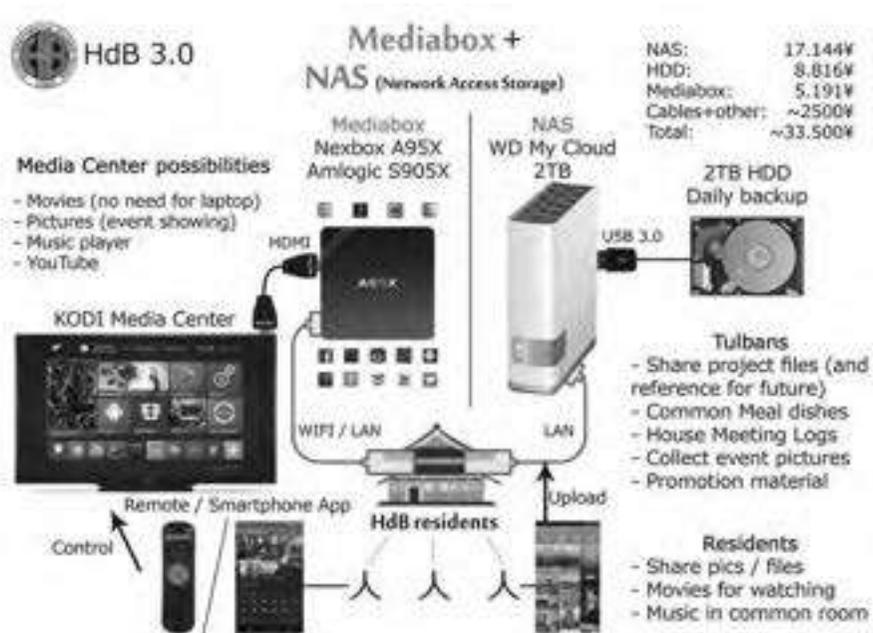
This concluded with us going outside in the snow just starting to fall, for a small performance by the Aikido club with a sword and staff. One sassy group photo later, we were all happily enjoying pizza.



High-Tech and PR (HTPR)

当番代表 Hossam Elsaka

- HT stands for High Tech, which is basically -in HdB terms- anything manufactured after the discovery of electricity. Originally, this toban was made to take care of a smooth and stable internet flow in the dorm as highly functioning printers. BUT, since this year, when a blender breaks, who you gonna call ?
- This year witnessed the introduction of a new network covering the east side of the building which ensured all residents an equivalent right of strong high speed internet connection 24/7 - 365(6).
- PR stands for Public Relations, we take care of our internet blog. Updates on our year-round events ensure the strength of the message of “global encounter” on which this dorm was built.



Year Book

当番代表 Ko Yanase

Year Book 当番は本書の制作にあたった。仕事内容としては、活動表と目次ページの作成、写真を集めてアルバムを作成など様々ある。その中でも、極めて大変な仕事は各当番からイベント報告の記事を集めることだった。毎年、記事集めは困難を極めた作業であるようだ。1月半ばにやっとその記事が集まり、その後はミーティングを複数回行い、記事や編集の修正を何度も重ねた。

他の当番と比べると裏方の仕事であり、決して華やかな当番とは言えないが、2016年の1年間のHdBを締めくくる本書に関われて光栄である。



資料

公益財団法人 京都国際学生の家 役員等

監事 (2016年度)

琴浦良彦	(市立長浜病院名誉院長)
浅田拓史	(大阪経済大学准教授、公認会計士)
折田泰宏	(弁護士)

評議員会 (2016年度)

岩崎隆二	(和晃技研(株)代表取締役社長、OM 会員)
中島理一郎	(元同志社大学教授、OM 会員)
吉田和男	(京都大学名誉教授、京都産業大学教授)
秋山雅義	(公益財団法人応用科学研究所理事)
西尾英之助	(京都日独協会会長)
平野克己	(日本塗装機械工業会専務理事)
蔦田正人	(蔦田内外国特許事務所代表、弁理士、OM 会員)
山田祐仁	(辻調理師専門学校、学寮運営委員長、OM 会員)

理事会 (2016年度)

理事長

内海博司	(京都大学名誉教授、NPO 法人さきがけ技術振興会理事長)
------	-------------------------------

常務理事

飯田悠哉	(HF、学術振興会特別研究員)
------	-----------------

理事

上村多恵子	(京南倉庫(株)代表取締役社長)
木戸康博	(京都府立大学教授、元 HF)
村田翼夫	(筑波大学名誉教授、OM 会員)
嘉田良平	(四條畷学園大学教授、OM 会員)
吉村一良	(京都大学教授、元 HF、OM 会員)
RUSTERHOLZ Andreas	(関西学院大学文学部教授)
吉川晃史	(熊本学園大学講師、公認会計士)
深海八郎	(眺八海倶楽部総支配人)

HF	:House Father
HM	:House Mother
HC	:House Committee
OM	:Old Member

顧問 (2016 年度)

所 久 雄	(社会福祉法人京都国際社会福祉協力会理事長)
神 田 啓 治	(京都大学名誉教授)
SPENNEMANN Klaus	(同志社大学名誉教授、 (公財) 日本クリスチャンアカデミー理事長)
平 松 幸 三	(京都大学名誉教授、OM 会員)
森 棟 公 夫	(椋山学園理事長・学長、京都大学名誉教授)
柴 田 光 蔵	(京都大学名誉教授)

学寮運営委員会 (HC) (2016 年度)

運営委員長

山 田 祐 仁	(辻調理師専門学校、OM 会員)
---------	------------------

運営委員

秋 津 元 輝	(京都大学教授、OM 会員)
坂 口 貴 司	(三菱電機株、OM 会員)
鈴 木 あるの	(京都大学講師)
TANANGONAN Jean	(近畿大学講師、OM 会員)
DAVIS Peter	(Telecognix Corporation CEO)
戸口田 淳 也	(京都大学教授、元 HF 、OM 会員)
松 橋 眞 生	(元 HF、京都大学学際融合教育研究推進センター 健康長寿の総合医療開発ユニット)
長谷川 真 人	(京都大学教授)
北 島 薫	(京都大学教授、元 HM)
飯 田 悠 哉	(HF)
HIDDING Adriana	(HM)

CHAIRPERSON of TEAM

VICE CHAIRPERSON of TEAM

職員 (2016 年度)

樋 口 洋 子
清 水 良 子
吉 竹 慶 一

2016年度 寄付金・補助金・その他ご支援

2016年3月1日～2017年2月28日受領分

敬称略

寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者
秋 山 雅 義	金 盛 彦	中 島 理一郎	村 崎 直 美
新 居 哲	木 下 研 一	中 山 宏太郎	村 田 翼 夫
石 田 栄 子	窪 田 弘	成 田 康 昭	森 井 基 躍
伊 藤 宏 樹	光 明 和 子	西 尾 英之助	森 棟 公 夫
岩 崎 隆 二	小 西 淳 二	西 本 太 観	文 字 健 二
岩 田 忠 久	木 葉 丈 司	野 田 和 伸	安 田 佳 子
岩 沼 省 吾	澤 田 正 樹	林 茂	柳 田 由紀子
内 海 博 司	杉 山 喬 一	Hanna Binder Ekedahl	藪 田 定 男
大 菅 克 知	鈴 木 武 夫	坂 野 泰 治	山 岸 秀 夫
岡 村 圭 造	鈴 木 松 郎	平 田 康 夫	山 口 忠 彦
岡 本 徳 子	高 田 徳 子	平 見 松 夫	山 下 進 一
小野寺 良 信	高 橋 晴 雄	深 海 八 郎	山 本 雅 英
加 藤 哲 雄	田 中 徳 壽	福 本 和 久	ユン ヨンソン
Nguyen Hai Minh	辻 正 樹	古 川 彰	吉 川 晃 史
金 澤 成 保	辻 村 哲 夫	古 川 千 佳	サン子ども園福泉 園吉川昭一
かまの外科医院	富 永 芳 徳	ボーイスカウト京都第42団	Lee Kyungmin
関 劍 平	所 久 雄	前 上 英 二	
関西オランダ人協会	永 井 千 秋	美 濃 導 彦	

寄贈品

国際ソロプチミスト京都—たちばな	ビール、ジュースなど
Domenico Cantatore	ワイン

補助金

平成28年度京都市外国人留学生交流等促進事業補助金 (ハウス行事に使わせていただいております。)	1,000,000円
---	------------

皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

(公財) 京都「国際学生の家」の略史

年	月	日	出来事
1961			
1962			
1963			
1964			
1965	4月	9日	日本側ハウスファーズ (HF)
1966	3月		稲垣 山中 (HF)
1967	4月		H.Inagaki K.Nakayama
1968	5月		I.Uchida
1969	7月		M.Ohsawa
1970	4月		H.Utsumi
1971	3月		I.Uchida
1972	6月		M.Yamamoto
1973	4月	12月	内海
1974	4月		H.Utsumi
1975	7月		M.Yamamoto
1976			
			トマムート コーラー
			F.Duermuth W.Kohler
			ペニンガー
			O.Pfenninger
			ベア
			O.Bar
			ケッター
			J.Kötter
			内田
			I.Uchida
			パットナム
			G.Putnum
S36			第一回京都「国際学生の家」建設発起人会(十一月十九日)
S37			第一回京都「国際学生の家」建設実行委員会(三月二十四日)
S38			理事長湯浅八郎博士就任(十二月十六日)
S39			学地(八寮鎮)建設工事を(八月月中旬)
S40			寄付を受ける(六月)
S41			寄付(二万七千五百六十フラン)
S42			寄付(二万七千五百六十フラン)
S43			西館増築工事及び改造工事開始(十一月八日)
S44			自動車事故発生(六月十四日)
S45			年報第一号発行(二月十八日)
S46			臨職問題発生
S47			財団法人万博協会より資金を受け、屋上改修工事
S48			臨職問題解決
S49			年報『出会い』第二号「十周年記念号」発行
S50			財団法人京都「国際学生の家」諸規則の改正(四月一日)
S51			十周年記念式典(五月十八日)

(公財) 京都「国際学生の家」の略史

(公財) 京都「国際学生の家」利用者の集計

● 学生の部 (レジデント)

国籍別利用者実数

1965年4月から2017年3月までの合計 81ヶ国 989名

アフガニスタン	6名	コンゴ	1名
アメリカ	45名	コートジボアール	1名
アルゼンチン	3名	ザイール	1名
イギリス	12名	シンガポール	18名
イスラエル	1名	スイス	12名
イタリア	5名	スウェーデン	3名
イラク	3名	スーダン	1名
イラン	13名	スペイン	1名
インド	17名	スリランカ	11名
インドネシア	25名	セネガル	1名
ウズベキスタン	2名	タイ	42名
エジプト	7名	台湾	24名
エストニア	2名	タンザニア	4名
エチオピア	2名	チェコスロバキア	4名
オーストラリア	2名	中国	55名
オーストリア	1名	朝鮮	4名
オランダ	11名	チリ	3名
カザフスタン	1名	ドイツ	38名
ガーナ	1名	ドミニカ	1名
カナダ	4名	トルコ	12名
韓国	50名	ナイジェリア	3名
カンボジア	13名	日本	317名
キプロス	1名	ニュージーランド	7名
キルギス	1名	ネパール	6名
グルジア	1名	ノルウェー	4名
ケニア	6名	パキスタン	6名
コロンビア	1名	ハンガリー	6名

バングラディシュ	4名	マリ	1名
フィリピン	16名	マレーシア	23名
フィンランド	1名	マダガスカル	1名
ブラジル	9名	南アフリカ	1名
フランス	8名	ミャンマー	16名
ブータン	1名	メキシコ	2名
ベトナム	34名	モロッコ	4名
ベネズエラ	2名	モンゴル	10名
ペルー	3名	ユーゴスラビア	4名
ポーランド	5名	ラオス	1名
ボリビア	1名	リトアニア	1名
ポルトガル	3名	ルーマニア	1名
香港	14名	レバノン	1名
ホンジュラス	1名		

● 学者・研究者の部（スカラー）

国籍別利用者実数（同一人物の利用・同行家族を含まない）

1965年4月から2016年12月までの合計 95ヶ国 3020名(内国籍記載なし17名)

アイルランド	1名	ウズベキスタン	1名
アフガニスタン	1名	ウルグアイ	1名
アメリカ	334名	エジプト	26名
アルジェリア	4名	エチオピア	1名
アルゼンチン	1名	オーストラリア	39名
アルメニア	1名	オーストリア	19名
イギリス	110名	オランダ	31名
イスラエル	10名	ガーナ	3名
イタリア	43名	カザフスタン	1名
イラク	3名	カナダ	46名
イラン	20名	カメルーン	1名
インド	98名	韓国	204名
インドネシア	114名	カンボジア	4名
ウガンダ	1名	旧ソビエト連邦	14名
ウクライナ	9名	キルギス	1名

ギリシャ	4名	ノルウェー	7名
ケニア	3名	パキスタン	14名
コスタリカ	2名	バーレーン	1名
コロンビア	1名	ハンガリー	10名
コンゴ	1名	バングラディシュ	15名
ザイール	1名	フィリピン	38名
サウジアラビア	1名	フィンランド	10名
ザンビア	1名	ブラジル	26名
シリア	1名	フランス	106名
シンガポール	25名	ブルガリア	4名
スイス	185名	ベトナム	32名
スウェーデン	12名	ペルー	6名
スーダン	3名	ベルギー	6名
スペイン	10名	ポーランド	30名
スリランカ	11名	ボリビア	1名
スロヴェニア	1名	ポルトガル	7名
セルビア	1名	香港	43名
タイ	181名	ホンジュラス	1名
台湾	94名	マダガスカル	1名
タンザニア	8名	マレーシア	37名
チェコスロバキア	12名	南アフリカ	2名
中国	166名	ミャンマー	10名
チュニジア	2名	メキシコ	6名
朝鮮（在日）	3名	モロッコ	6名
チリ	7名	モンゴル	1名
デンマーク	5名	ユーゴスラビア	13名
ドイツ	295名	ラオス	2名
ドミニカ	2名	ラトビア	3名
トルコ	22名	リトアニア	1名
ナイジェリア	4名	ルーマニア	3名
日本	328名	ルクセンブルグ	3名
ニュージーランド	10名	ロシア	20名
ネパール	10名		

公益財団法人京都国際学生の家後援会会則

(目的)

第1条 この規程は、公益財団法人京都国際学生の家（以下財団という。）の後援会員の入会及び退会並びに会費の納入に関し、必要な事項を定めるものとする。

(会員)

第2条 財団の事業に賛同し、財団を支援する意を有するものは、後援会員となることができる。

- 2 会員になろうとする者は、所定の申込書を、代表理事あてに提出するものとする。

(会費)

第3条 会員は理事会で定められた会費を、入会時に納入するものとする。

- 2 年会費は会員種別に応じて下記各号のとおりとする。

- | | | | | |
|-----|--------------|----|----|----------|
| (1) | 個人会員 (OM 会員) | 年額 | 一口 | 5,000 円 |
| (2) | 法人・団体会員 | 年額 | 一口 | 30,000 円 |

*OM= Old Member、元寮生

(退会)

第4条 会員は、いつでも退会届を財団に提出することにより、退会することができる。

- 2 前項の場合、当該年度の会費が未納のときは、これを納入しなければならない。
- 3 既納の会費は、いかなる理由があってもこれを返還しない。

(改正)

第5条 この規程の改正は、理事会の議決を経て行うものとする。

附則

- 1 この会則の施行に関し、必要な事項は別に定める。
- 2 この会則は、公益財団法人の設立登記の日（平成 25 年 4 月 1 日）から施行する。
- 3 この改正会則は、平成 26 年 3 月 10 日より施行する。（平成 26 年 3 月 8 日第 3 回理事会にて改訂）

施設概要

所在地	京都府京都市左京区聖護院東町 10		
敷地面積	1,900.28 m ²		
建築面積	531.21 m ²		
延面積	1,778.78 m ²		
構造	本館	鉄筋コンクリート造	地下 1 階 地上 4 階
	西館	鉄筋コンクリート造	地上 2 階
各階用途	本館 1 階	事務室、会議室、ラウンジ、遊戯室、行事用キッチン	
	本館 2・4 階	学生居室 34 室、キッチン 2 室、シャワールーム 2 室	
	本館 3 階	ハウスペアレンツ室、客室 7 室	
	本館地下	洗濯室、トイレ、倉庫、機械室	
	西館	客室 5 室、ボーイスカウト会議室	
学生居室	面積 13 m ²	洗面設備、ベッド、クローゼット、本棚、机、椅子、エアコン	
その他設備	日本庭園、バレーボール・コート、卓球台、ビリヤード、ピアノ		

編集後記

薦田 正人

(イヤブック編集委員、弁理士・薦田内外国特許事務所所長)

今回は「研究者棟新築及び本館耐震・改修工事に向けて」の特集号ということで、巻頭言等の冒頭部分において、ハウスの理念や沿革について述べられています。また、【ハウスの特色と意義】においては、従前のイヤブックに掲載された、ハウスの理念等に関する文を再掲しています。

村田翼夫編集委員長による巻頭言『「平和センター」としてのハウスー協働の意義ー』では、タイ南部のヤラー市にある「平和センター」が紹介されています。このセンターは、マレー系イスラーム教徒とタイ系仏教徒との平和共存・共生を目的として設立されたものです。対立、紛争が発生し、過激派のテロも起こっている地域で、両者が、山羊・牛の飼育、油椰子の栽培などの協働作業を通じて、相互理解と、信頼関係を築いているところが紹介されています。そして、この「平和センター」のプロジェクトはハウスの目指すところと合致するとされています。

内海博司理事長の「研究者棟新築及び本館耐震補強・改修工事に至る経緯」では、ハウスの改修・新築案の概要、経緯、資金面などについて図面を交えて論じられ、また、その前提としてのハウスの理念や、ハウス創設から現在に至るまでの経緯や問題点について説明されています。

嘉田良平理事による「新たな社会貢献をめざして」では、ハウスの国際交流の先駆者としての役割、なかんずく、多文化共生拠点、国際民間企業連携拠点、コミュニティ防災拠点としての社会貢献について論じられています。

さらに、故稲垣博先生の「スイス『出会いの家』協会とその活動について」の一文が、また、ウェルナー・コーラ先生が起草された『「出会いの家」創設趣意書』が掲載されています。

従前のものの再掲分はいずれも力作ぞろいですが、特に、ハイデルベルグ大学でコーラー先生の指導を受けられたシュペネマン・クラウス理事による「出会いの家」では、「出会い」が1920年代にヨーロッパの哲学や神学により打ち出された概念であり、そこでは、人は決して一人では豊かな人間になれない、豊かな人間になるために他者との深い関わり合いが必要であると説かれたとされています。そして、第二次世界大戦後、この概念がヨーロッパの社会や政治の理念になり、コーラー先生と同世代の若者にも大きな影響を与えたとのこと。コーラー先生の「出会い」の思想の背景に

このような 1920 年代以降のヨーロッパの思想的な潮流があったことを知り、「目から鱗」の思いです。この文では、最後に、コーラー先生が提唱された「出会い」の 4 つの段階が紹介されています。

鈴木松郎氏の「HdB との出会い」では、ボーイスカウトの活動とハウスとの関係を通して、ハウス創設の前後の事情が詳しく説明されていて、興味深いものがありました。

また、ダニシマズ・イディリス氏による「京都『国際学生の家』における生活に関する評価—他者理解という観点から—」においては、「私にとってこの寮で得た教訓というのは、国際的な空間においては、自分が思うように振舞うのではなく、他者が様々な文化を持っているということを前提に、誤解を起こさないように常に気をつけて他者と接触しなければならないということでもあります。」と述べられています。

次に、【HdB を巣立って】の各文も印象に残りました。とりわけ、かつてのスイスのハウスマザー、Elisabeth Vollenveider-Varga 氏（いまハウスに滞在中）による HdB との桜の思い出についての一文は心を打つものがあります。また、置田和永氏の「退職後の生き方を教えてくれた HdB との出会い」、倉田麻里氏の「HdB からフィリピンそして故郷へ」は、それぞれ、ミャンマーとフィリピンの現地に溶け込んだ活動の様子が綴られた興味深い文です。

最後に、【活動報告】の各文も簡潔にまとめられていて、ハウスの活動をよく知ることができます。特に、ハウスペアレンツの Rianne Hidding さん(HM)、飯田悠哉さん(HF)、洋慈さん(HC)による「ハウスペアレントとしての最初の 1 年間を振り返って」においては、ハウスペアレントとしての日常のご苦労が淡々とそして軽やかに記述されていて、さわやかな印象をもちました。特にレジデントとスカラーとの関係につき、「それぞれの学問上の蓄積をいちど、レジデントやペアレント含めハウス内外の専門外の人々に向けて紹介して話をしてもらい、異分野間でディスカッションして行くようなセミフォーマルな場がつかれないかと思案しています。いうなればせっかくきたスカラーをもう少しハウスの活動にひっぱり込み、組み込めないかと思案するのです。」と述べられている点は、私も同感するところが大です。

さて、最後になりますが、私は昭和 42 年（1967 年）にハウスに入り、ゲストとしての期間を含めて約 3 年間生活しました。私が居りましたところは、生真面目なアジア人留学生と自由奔放なヨーロッパ人のアーティストとの間で葛藤が激しく、軽い暴力事件なども珍しくはなく（主に、ヨーロッパ人のアーティストが女性を部屋に招いたことに「義憤」を感じたアジア人留学生や日本人学生が怒り出したことが原因で）、また、何かの問題があった折に、稲垣先生の呼びかけで日本人学生だけのミーティングが行われたことにコーラー先生が激怒されるなど、なかなか刺激的で暑い日々でした。今の紳士的な学生さんからは想像できないことかも知れませんが、文字どおりの encounter（会戦、衝突）であり、私などはその生活を大いにエンジョイしておりま

した。

私は、永らく、弁理士という、知的財産権を取り扱う職業に従事してまいりましたが、知的財産の保護は国境を越えて行われます。日本の企業が、アメリカ、中国などの外国で特許権などの知的財産権を取得したり、あるいは権利を侵害する第三者に対して訴訟を提起する場合には、現地の同業の人達（弁理士、弁護士）に依頼します。逆に、外国の企業が日本において知的財産権を取得したり、裁判を行ったりする場合には、私達に依頼をしてきます。このようにして、知的財産権を扱う弁理士や弁護士は国境を越えて交流があり、ネットワークを形成しています。このような状況は、ハウスにいたころに国籍を意識することなく、寮生同士で交流をし、共同の活動をしていたのと同じです。そのような意味で、私は、現在、意図することなく、ハウスの延長上の生活を送ることができています。

今後のハウスの益々の発展を祈っています。

—当財団への寄付金に関しては税務上の寄付金控除があります—

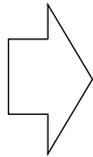
【個人の場合】

賛助寄付金が2,000円を超える場合には、この超えた金額が当該年度の課税所得から所得控除または税額控除として控除されます。

【法人の場合】

特定寄付金として一般寄付金の損金算入限度額と別枠で損金算入限度額に相当する金額まで損金に算入できます。

点線より切り離してご使用ください



02 大阪		払込取扱票										通常払込料金 加入者負担					
口座記号番号	010708	千	百	十	万	千	百	十	万	千	百	十	万	千	百	十	円
加入者名	(公財) 京都「国際学生の家」												料 金				
通 信 欄	年度賛助寄付金をお願いします。 <input type="checkbox"/> 賛助寄付金 (法人) () () <input type="checkbox"/> 賛助寄付金 (個人・OM(入寮年度; _____年)) () ()												特殊 取扱				
ご依頼人	* 賛助寄付金が2,000円を超える場合には、その超えた金額が当該年度の課税所得から所得控除または税額控除として控除されます。 法人会員1口3万円、個人及びVOM会員1口5千円とする。												おとところ (郵便番号) _____) ※ おなまえ _____) (電話番号 _____)				
日 附 印	様 日 附 印												日 附 印				

各票の※印欄は、ご依頼人において記載してください。

裏面の注意事項をお読みください。(ゆうちょ銀行) (承認番号大第42986号)
 これより下部には何も記入しないでください。

振替払込請求書兼受領証

口座記号番号	010708	千	百	十	万	千	百	十	万	千	百	十	円			
加入者名	(公財) 京都「国際学生の家」												料 金			
金額	※ おなまえ _____) ※ _____)												様 日 附 印			
ご依頼人	様 日 附 印												日 附 印			

記載事項を訂正した場合は、その箇所に訂正印を押してください。
 切り取らないでお出ください。

この受領証は、大切に保管してください。

公益財団法人京都「国際学生の家」後援会則

(会員の委託)

第1条 本会は、次のいずれかに該当する者をもって組織する。

- (1) 賛助寄付金10以上の拠出を約請した法人(法人会員)。103万円
- (2) 賛助寄付金10以上の拠出を約請した個人(個人会員)、そのうちで、財団で在寮生であった個人(OM会員)。105千円

2 会員が拠出すべき賛助寄付金(税務上の寄附金控除あり)の額は、付則により定める。

(ご注意)

- ・この用紙は、機械で処理します
ので、金額を記入する際は、枠内
にはつきりと記入ください。ま
た、本票を汚したり、折り曲げた
りしないでください。
- ・この用紙は、ゆうちょ銀行又は
郵便局の払込機能付ATMでもご
利用いただけます。
- ・この払込書を、ゆうちょ銀行又
は郵便局の渉外員にお預けになる
ときは、引換えに預り証を必ずお
受け取りください。
- ・ご依頼人様からご提出いただき
ました払込書に記載されたおとこ
ろ、おなま等は、加入者様に通
知されます。
- ・この受領証は、払込みの証拠と
なるものですから大切に保管して
ください。



この場所には、何も記載しないでください。

公益財団法人 京都「国際学生の家」へのご寄付に対する 寄 付 金 控 除 に つ い て

当財団への寄付金に関しては、税務上の寄付金控除があります。

●個人の場合

寄付金が2千円を超える場合には、その超えた金額が当該年度の課税所得から所得控除として控除されます。

●法人の場合

特定寄付金として一般寄付金の損金算入限度額と別枠で損金算入限度額に相当する金額まで損金に算入できます。

これらのご申告の際には当財団発行の領収書をご提出ください。

※本誌 P. 90 に後援会会則を掲載しております。

Haus der Begegnung, Kyoto Year Book, Vol. 41

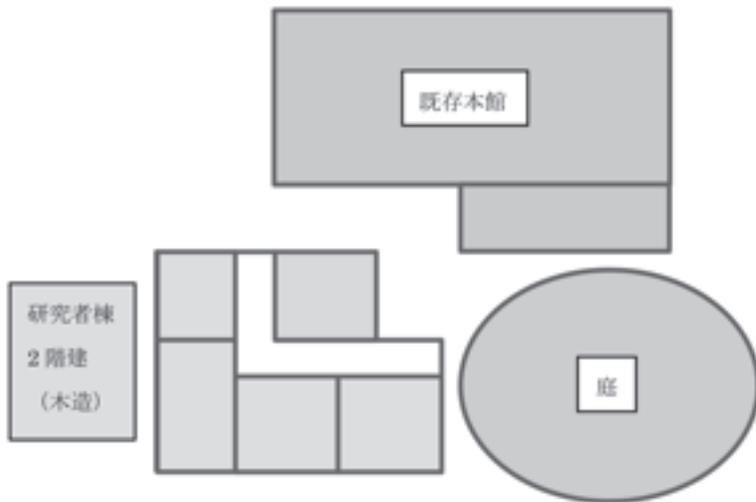
(Kyoto International Student House)
10, Higashimachi, Shougoin, Sakyo-ku,
Kyoto, 606-8325 JAPAN

イヤーブック 第41号
編集者 内海 博司 村田 翼夫
葛田 正人 飯田 悠哉
パク チスル 築瀬 康

発行日 2017年3月31日
印刷所 (株)コムラ (058-229-5858)
発行者 公益財団法人 京都「国際学生の家」
〒606-8325
京都市左京区聖護院東町10
TEL 075-771-3648



庭から観た新研究棟（木造2階建て）と本館（鉄筋4階建て）



新研究棟と本館のレイアウト